

篠田恭一戦争回想録

岳麓山の攻撃

昭和五十年六月十日印刷
昭和五十年六月十八日発行

著者 篠田 恭一
発行者

発行所 大阪府池田市建石町二番十八号
(著者宅) (郵便番号五六三)

〔頒価二百円〕

シリーズの表題 (★印既刊)

新関、白沙渡の攻撃 (昭和十八年十一月)

馬峯田の攻撃 (昭和十八年十一月)

★岳麓山の攻撃 (昭和十九年六月)

★常寧の攻撃 (昭和十九年九月)

復興隊長奮闘記 (昭和十九年十月～十二月)

姑娘の虐殺 (昭和二十年四月)

金志忠の思い出 (昭和二十年九月～昭和二十一年一月)

呉淞、第五兵站勤務隊 (昭和二十一年二月～六月)

軍隊生活挿話集 (昭和十七年二月～昭和二十一年六月)

篠田恭一戦争回想録

岳麓山の攻撃

(昭和十九年六月)

篠田恭一戦争回想録

岳麓山の攻撃

(昭和十九年六月)

著者の軍隊歴



中尉当時の著者

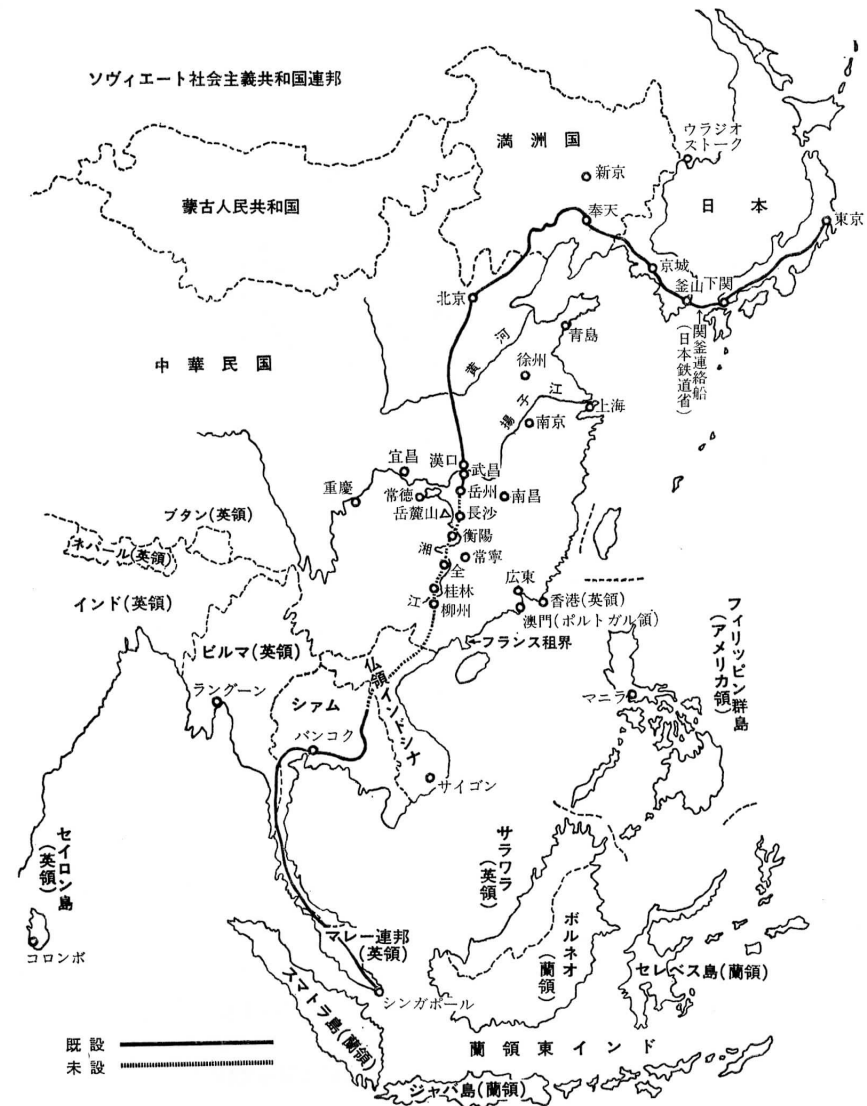
昭和17年2月1日、中部第22部隊（八連隊）に入隊。同年4月甲種幹部候補生採用試験に合格、5月久留米予備士官学校に入学を命じられた。10月、見習士官となって原隊に復帰。翌18年2月、樺部隊（第34師団）歩兵第216連隊に転属。同師団司令部は中華民国江西省南昌にあり連隊本部はその西北30軒の安義県城内にあった。

連隊では第5中隊に配属された。同中隊の小隊長として常德作戦、湘桂作戦に参加、^{カンシー}広西省全県（県城は全）まで進出した。19年12月暗号教育のため遠く北京まで派遣された。翌20年4月前線に復帰して敵中突破作戦に参加。同年8月15日^{ろざん}廬山の麓で終戦をむかえた。

終戦後は南京の揚子江対岸で帰国命令を待ち、部隊は21年2月1日上海から乗船した。乗船の前日著者は大隊長から下士官7名兵20名と共に呉淞第五兵站勤務隊要員として残留を命じられ同年6月10日まで同部隊副官として勤務した。10日佐世保に上陸、部隊は復員を完了したが著者は人事係曹長と共に一週間残務整理に従事した。

昭和22年11月、大阪府立池田高等学校教諭となって今日に至っている。担当科目は英語。

開戦当初における東亜の国際勢力と
湘桂作戦当時の大陸縦貫鉄道の構想



また負けたか八連隊

樁部隊

私は樁部隊に所属していた。樁とは防諜名で正確に言えば第三十四師団。師団長は伴健雄中将。将兵の殆ど全てが大坂府の出身者で編成されていた。「また負けたか八連隊」とは大坂人にとっては耐えられない屈辱の言葉である。日清日露の戦役の頃からこの言葉は日本全国に広まっていたらしいから何か余程不名誉なことがあったようだ。大坂市東区法円坂町（現在日赤病院のあるところ）にあった八連隊は日露戦争で満洲やシベリアに出兵してもいづつも予備隊でまともな戦争はさせてもらえなかったといわれている。

樁部隊は直接八連隊とは関係がなかったが、それでも将兵の多くは、応召した時に一度八連隊の営門をくぐっているか、または半年や一年くらいは八連隊の飯を食ってから転属してきたという経歴があるだけに、明治以来のこの汚名をそそぎたいという願いが常にあった。それが樁の精神となって昭和十四年師団創設以来、宜昌作戦、浙贛作戦、湖北殲滅作戦、常德作戦など幾つもの作戦を立派にやりとげてきたのである。

殊に今度の作戦は日露戦争で橋中佐を生んだ名古屋の幸部隊、日支事変当初「麦と兵隊」でその名を知られた徐州大会戦の立役者仙台の鏡部隊、そのほか鹿児島都之城の光部隊、熊本の樅部隊、四国善通寺の鯨部隊、京都の嵐部隊、広島の開部隊など古豪猛者連と一緒に参加するとあっては絶対に負けられないという意地も手伝って警備地を出發する前から全員士氣頗る旺盛であった。

湘桂作戦

湘桂作戦は昭和十五年五月に開始された。その目的はマレー半島の南端のシンガポールから大陸を北上して朝鮮半島の釜山にまで達する、延々六千キロに及ぶ鉄道を完成するためであった。南洋の島々には鉄をはじめとして錫、

銅、アンチモニー、石油など飛行機、大砲、爆弾などを造るに不可欠な資源が無尽蔵に眠っている。アメリカの豊富な軍用資源に対抗して戦争を続けていくためには、日本はどうしてもこれらの南洋の資源が必要であったのだ。世にハワイ・マレー沖海戦と称されているように、日本がアメリカと開戦すると同時に、いち早くこれらの島々に進駐したのはこの緻密な計画にもとづいたものである。

海運国日本は尨大な船舶の数に物を云わせてこれらの資源を北九州や東京湾沿岸をはじめとする軍需工業地帯に昼夜兼行で輸送した。戦争の見通しは明るく日本人の顔は輝やっていた。

一方アメリカにしてみれば、ただ手を拱いてこれを見ているわけにはいかなかった。劣勢を挽回するために彼らがとった対抗手段が潜水艦作戦だったのである。彼らは全エネルギーを潜水艦の建造とその乗組員の養成に集中した。この作戦は図にあたって開戦後一年ばかりした昭和十七年秋頃から日本

の輸送船団は次々とアメリカ潜水艦の餌食となりはじめ貴重な軍用資源は空しく南太平洋の藻屑と化していったのである。

戦況不利のうちに昭和十八年がすぎた。資源が乏しくなった日本は飛行機も弾薬も不足してきた。そして遂に昭和十九年五月、日本がとった起死回生の作戦が湘桂作戦であった。この作戦が成功した暁には、大陸を南北に貫く長距離鉄道が実現して、南方の物資は船舶ではなく陸路によって日本まで運ぶことが出来るのである。それは第二次世界大戦の勝利の女神が再び日本に微笑みかける瞬間であった。もし失敗すれば、それはまぎれもなく日本の敗戦を意味した。

五十一万人の進撃

湘江に沿って南下する日本軍は五十万。迎え撃つ中国軍は百万といわれていた。まさに世紀の大決戦である。

湘江ぞいには、中国側が粵漢鉄路と

であった。

どの部隊も緒戦に参加しなかった。

命令、樁部隊に下る

岳麓山

さて岳麓山であるが、確かにこの山は今度の作戦の第一関門である。敵はこの線で日本軍を殲滅できると信じていた。蒋介石は外人記者団に対して、岳麓山は東洋のスターリングラードである、絶対に日本軍にこの陣地を抜かれることはないと断言していた。それは決して空威張りではなかった。日本軍はそれまでに三回（蒋介石は九回といっている）長沙作戦を試みたことがあったが三回とも長沙の対岸にある岳麓山から雷のように撃ち下ろしてくる巨砲のために残念ながら全滅しているのである。

歴史に残る岳麓山攻城戦を花と飾って郷土の名譽を高めたかったのである。

その岳麓山攻撃の命令が大坂編成の樁部隊に下ったのである。軍司令官横山勇中将の英断である。師団長伴健雄中将は「岳麓山は必ず取ってお目にかけます」と感涙にむせんで答えたという。師団の将兵もまた部隊の名を挙げ、好機到来とばかりに意気まさに天を衝くものがあつた。

岳麓山は湘江の西岸にある。昭和十九年六月十一日、それまで湘江の東岸を前進していた師団は霞凝港で西岸に渡河した。霞凝港は長沙の北方十五軒のところにある古い町で第一次長沙作戦のとき敵はこの町を長沙の如くに偽装した。日本軍はその計略にまんまとひっかかりこの町に攻めこんだため砲弾を周辺の陣地から雪崩のように叩き

呼んだ鉄道が桂林まですでに完成していたのであるが、アメリカと同盟を結んでいた蒋介石は日本軍に使わせてなるものかとその鉄道の大部分を自ら破壊してその地域の要所所に堅固な陣地を築き日本軍の進撃を待ち構えていた。

樁、檜、幸、鏡、……どの部隊も岐路に立った日本民族の運命を担っているという責任感と共に郷土の名譽をかけたという自負もまた強かった。幸は金のシャチホコで有名な尾張名古屋を、鏡は伊達政宗の城下町仙台を、そして樁は八連隊で有名な大坂を当然意識した。父祖の代から伝わる幕藩体制の名残りかもしれないが、甲子園の野球にさえ郷土のチームが出場すれば血道をあげる日本人である。戦場では尚更のこと、ほかの師団に負けるものかという功名争いに駆立てられたのも不思議ではない。

連日行軍をつづけているそれらの部隊の将兵の念頭にあるのは「岳麓山の攻撃命令はどの部隊に下るか」の一事

込まれて大打撃を蒙ったと云われている。町は殆どの家がその時の砲撃で無残に破壊されたままであったがくずれ残った大きな黒い煉瓦塀一ぱいに「仁丹」という広告文字が白く書かれているのが残っていてまだ両国が平和な関係にあった時代の面影をとどめているのが印象的であった。

さて軍は従来の経験から岳麓山の攻撃は歩兵だけでは無理だと考えたのか航空隊、戦車隊、砲兵隊を協力させることにした。そして私たちが湘江を渡河した日、新たに師団に配属された山砲隊から次のように申し入れてきた。

わが山砲の威力がどのようなものであるか実弾射撃をしてご覧にされるから本日午後二時將校全員は見學に来隊されたい。

師団山砲隊

行ってみると山の頂上に、いつも見馴れている歩兵砲とは比較にならないどっしりとした山砲が五門ならべてあ

り双眼鏡で見ると二軒ばかり谷を距てた正面の山には点々と赤旗が立ててある。それを敵陣地と看做してこれから実弾を打ち込もうというわけである。「撃て！」

と指揮官の将校が号令を下すとその瞬間正面の山に砲弾が炸裂した。見事に命中している。号令を下すのと谷の向うで砲弾が炸裂するのが同時である。弾丸が飛んでゆくのに何秒かかかると思っていた私は驚いた。矢継早やに五門の砲が火を吐いて谷向うの山には凄じい砲煙が次々と上った。見学者の間に感嘆の声が洩れた。

「これは序の口です」

指揮官は得意そうに笑って今度は五門の砲を同時に撃たせた。五つの砲煙が正面の山で一度に噴き上った。

「驚くのはまだ早い。次は五門で一地点を撃ってお目にかけろ」

指揮官がそう云って号令をかけると五門の砲は同時に火を吐き正面の山には天地を震動させて一本の巨大な火柱が立った。砲は兵士たちの手で素早く

操作され仮設された五つの敵陣地に次々と五つの砲弾が同時に炸裂して巨大な火柱を噴き上げるのであった。

「今度の作戦は儼然がついて行くんです。歩兵さんは安心して下さい」師団山砲の将校は自信たっぷりにそう云って笑った。

行軍が始まった。草原の中の道を歩兵は一行隊になって進んだ。すこし離れて、平行した道を山砲隊が進んでいく。砲車の音がカラカラとびびきそれをひく馬の蹄も軽ろやかだ。

遙か彼方の地平線上に雲のように岳麓山が見えてきた。故郷の六甲山に何となく似た感じだ。空は美しく晴れて兵士たちも笑っているように見える。

しかし次の日から天候は突如雨に変わった。道は泥の海となる。馬は倒れ砲車は車軸まで粘土の中に埋まって動かなくなった。山砲隊の行軍は遅れに遅れて、遂にその翌日には、その姿さえ見えなくなってしまった。

この山砲隊は元来下士官候補者を教

育するための教育隊であるときいていた。いわば軍隊の中の学校である。将校は教官であり兵は生徒であった。将校連の口が達者なのは平素の講義の口調が出たものと思われる。そして演習のあざやかさと実戦のもろさ。学校というところはどこもせいぜいこの程度のことしか出来ないのかもしれない。六月十四日。空は再び晴れた。然し師団山砲は来なかった。

雨で前日見えなかった岳麓山はその日晴れてみると驚くほど近くにせまっていた。そして恰も巨峰岳麓山の余波であるかのように、急にあたりに丘陵が多くなった。

鉢巻山

その日の午後三時頃、師団の先頭を進んでいた歩兵第216連隊の第二大隊は行手を低い山にはばまれたのである。

高さは百米あまり、奈良の若草山のように全山芝草で掩われているが駱駝の背のように稜線が二つのコブになっ

第34師団（樞部隊）

歩兵第216連隊
第一大隊（第1、2、3、4中隊と第一機関銃中隊）
第二大隊（第5、6、7、8中隊と第二機関銃中隊）
第三大隊（第9、10、11、12中隊と第三機関銃中隊）
連隊砲中隊・通信中隊・乗馬小隊
歩兵第217連隊（編成は歩兵第216連隊に同じ）
歩兵第218連隊（編成は歩兵第216連隊に同じ）
工兵隊・輜重隊・通信隊・野戦病院・靖安隊（元中国兵を含む工作隊）

歩兵第216連隊第五中隊編成表（岳麓山攻撃当時）

中隊長 松下正克中尉		連絡係 白洲正夫兵長			
指揮班 班長・田村博軍曹	第一小隊 小隊長・篠田恭一少尉	第一分隊 分隊長・中西正雄軍曹	兵14名		
	第二小隊 小隊長・西川善雄准尉	第二分隊 分隊長・松井辰雄軍曹	兵14名		
		第三分隊 分隊長・松岡美好軍曹	兵14名		
		第四分隊 分隊長・山中年郎兵長	兵14名		
	第三小隊 小隊長・仲森三郎曹長	編成は第一小隊に同じ			
	編成は第一小隊に同じ	兵20名。中隊長伝令、衛生兵、連絡兵、大隊本部命令受領者、通訳要員などを含む			

をしめたこの異様な形の山を、地面に伏せたままじっと見つめていた。

作戰要務令寸譜

さて、ここでちょっと作戰要務令の講義をしておく必要がある。樗部隊が岳麓山を攻撃するといっても、それを構成している三つの連隊（歩兵第26連隊、第27連隊、第28連隊）の総勢一万余人が運動会の棒倒しみたいに一団となつて攻めよせられるものではない。道は一本道である。まずどれか一つの連隊が前に出なければならぬ。その先陣を承ったのが石川明大佐の率いる第26連隊であった。

そして第26連隊と雖も細い道を団子になつて進めるわけではない。第一大隊、第二大隊、第三大隊と三つある大隊のうちどれか一つの大隊を先頭にもつて来なければならぬ。石川連隊長は第二大隊を攻撃のとき第一線に使う予定だったので行軍も第二大隊に先鋒を命じていた。行軍間先鋒をつとめる

大隊を前衛という。第二大隊長山口新三少佐は陸士の51期で発刺たる二十七才の好漢、馬上の姿はどこかナポレオンを彷彿とさせるような風貌をそなえていた。恐らく三人の大隊長の中で最も信任が厚かつたのであらう。

前衛第二大隊を構成しているのは第五、第六、第七、第八中隊と第二機関銃中隊、この五つの中隊である（一箇中隊の人員は約二百人）。前衛が行軍するときは機関銃中隊を除いた四つの中隊が毎日交替で先頭に出る。先頭に出る中隊を尖兵中隊という。そして六月十四日、鉢巻山を正面に見たときの尖兵中隊は第五中隊であった。中隊長は幹部候補生五期の松下中尉である。

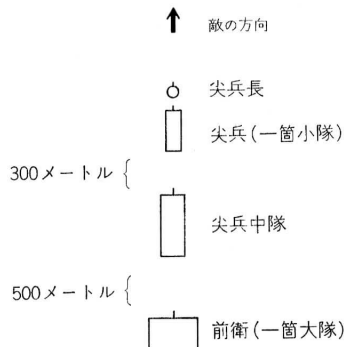
さて、中隊は更に三つの小隊にわかれる。中隊が尖兵中隊になるとその三つの小隊のどれか一つを三百米前方に出して行軍する。その小隊が文字通り日本軍の最先端である。前にはもう日本軍はいない。その小隊のことを尖兵という。

作戰要務令第一部の第百六十二条は

次のように説いている。

尖兵は通常將校の指揮する歩兵一小隊以下の兵力を以てこれに充て主として進路上の搜索に任せしむるものにして尖兵長は通常尖兵主力の前方に在りて行進し前方に発生する事件を速かに判別するを要す。

「尖兵長は通常尖兵主力の前方に在りて行進」すると定められたその尖兵長をその日つとめていたのが幹部候補生七期の篠田少尉つまり筆者であった。これでやっと、篠田恭一戦争回想録「岳麓山の攻撃」の筆者の位置に焦点をあてることが出来たわけである。



第五中隊鉢巻山を攻撃せよ

断崖の下で

もう一度繰り返すと、六月十四日午後三時頃、第五中隊が尖兵中隊のとき鉢巻山に突き当たった。尖兵長は私であった。鉢巻山は戦術上の要所でそこに陣取った敵を撃破しなければ樗部隊はどうしても岳麓山に進出することが出来ないものである。

第二大隊長山口少佐は尖兵中隊である第五中隊に鉢巻山の攻撃を命じたのである。距離は約五百米。攻撃せよというのは此方から鉄砲をポンポンうてということではない。敵陣地の敵を殺すか追っ払うかしてその陣地を占領せよということである。

第一小隊が第一線を命じられた。私は分隊長を集めて指示を与えると草原

の中へ走り出た。四つの分隊が疎開してあとにつづく。ダダダダダ……。待ってましたとばかりに足元に機銃弾が飛んで来た。止まると当るのだから我武者らに鉢巻山めざして駆けつづける。

後方からは歩兵砲が援護射撃をはじめてくれた。二十秒おきくらいに鉢巻山のでっぺんで砲弾が轟音をたてて炸裂する。山砲ほどではないが実に頼母しい。おかげで敵の機関銃は鳴りをひそめ小隊は演習の様に走りつづけた。山麓に到着。そこは死角になつていたので敵からは見えない。草の間に伏せて呼吸をととのえる。中隊長も指揮班をつれて到着し私のすぐ横に位置を占めた。通信隊の兵が一人、六号無線機をもつてついてきている。

第二小隊、第三小隊も左手に散開を終った。歩兵砲の砲撃がやむのを待つ

て私たちは草の間を匍匐で前進した。目の前に高さ三米ばかりの断崖が壁のように立ちだかっている。おまけにその手前に深い壕が掘ってあって跳び下りたら最後ふたたび上ってくることは出来ないだろう。そしてその壕の底から前の崖を上るとすれば更にその高さは増加するわけで肩車はおろか梯子をもってきても登れるようなシロモノではなかった。

「こんなもん登れるかい」

松下中尉はぶりぶりして云った。

「俺には始めから分ってたんや。大隊長が行けいうさかい来てはみたけど」

確かにこの巨大な鉢巻が何であるか分っていたら危険を冒して接近するだけ野暮だったと云えそうである。

「崖の前に深い壕があって行かれへん云うてくれ」

中隊長は六号無線機をもった通信兵に命じた。六号無線機は現在のトランシーバーに似た性能をもっていて電話と同じように送話器と受話器があり一軒位の距離なら楽に通話が出来た。

夜襲

薄暮までの三時間余りの中隊長は森のかげに入って夜襲準備に費した。日が暮れる。全員鉦が音をたてないように軍靴を薬で巻き、鉄帽も月の光や星の光を反射しないように草で蔽うか泥を塗りつけるかして道路上に整列した。お互いに前の者を見失わないように背囊のうしろに白い布か紙をつけ、小隊長は白いたすきをする。

十文字のたすきをかけた中隊長が私を呼んで小声で云った。

「篠田君、きみ一小隊を指揮してあの小さい方のコブを占領してくれ。俺は二小队と三小队を指揮して大きい方のコブを取るさかい。それから、きみ、すまんけど先に行ってくれへんか」

私は第一小队を率いて先発した。

「地雷に気をつけて行けよ」

中隊長がうしろの闇の中から注意する。岳麓山の前面の道路には無数の地雷が埋められているという情報が作戦

「大隊本部、大隊本部」通信兵が呼び出している。本部はすぐに出た。

「崖の前に深い壕あり攻撃前進不能」

二、三度そう繰返したあと急に緊張した顔になって中隊長を振り返った。

「大隊長殿が出ていられます。中隊長殿と替るように云われています」

松下中尉はひたたくるように受話器をとった。

「もしもし松下でありますが」

二言三言はなしていたがだんだん大声になってきた。

「中隊長殿、敵に聞こえますよ」

私はうしろから注意した。

「そりゃ裏側は崖になっていないと思います。然し裏側にまわる道は右側の隘路しかありません」

大隊長は山の裏側へまわるように指示しているらしかった。

「地雷があると思います。それに上から丸見えます。歩兵砲からは死角になります」

中隊長はこの隘路を通りたくないのだ。上から敵が撃つ、大隊長はその敵

の当初から部隊に寄せられていた。昼のように疎開して走る必要はなかった。こっそりと田圃の中の細い道を鉢巻山西側の隘路に向って進んだ。敵は気付いていないらしく陣地の上は静まり返っている。

いよいよ隘路に差しかった。左は肩がふれるほどに山の斜面が迫っており右は深い水流になっている。敵がこの山の上に陣地を構えた理由が今更のようによく分った。日本軍が何十万押寄せて来ようと、皆この狭い場所を通らなければならないのだ。しかし何故この道路上に敵は軽機関銃の一挺くらいは備えておかなかったのだろうと不思議に思えた。特に夜間はバリケード

くらいあってもよさそうである。私は小隊の先頭になってその場所を通過した。心配していた地雷はなかった。山の側面と水路のあいだに人工的にコンクリートを固めて作った道であったため地雷を埋めることが出来なかったのであらう。

流れの音が激しいので日本軍の通過

を歩兵砲でたたいてやるといっているらしかった。しかし山の裏側に機関銃を据えつけられたら此方から歩兵砲で撃つことが出来ない。第五中隊は戦死者続出ということになりかねない。えらいことになってきた。それでも大隊長は行けといっているらしい。

「夜襲にしましょう。夜だったら行けます。意見具申して下さい」

私は思わず後ろから叫んでいた。ふ

と頭に閃いたのだ。閃くと同時に言葉になって口から飛び出したのである。

「夜襲、夜襲させて下さい。少し時間は遅くなりますが夜襲でしたら必ず成功してみせます」

中隊長はそう云って口をつぐんだ。向うからは返事がないらしく中隊長は受話器を驚づかみにしたまま。しばらくしてから大声で答えた。

「分りました、そのようにします」

につこり笑って振返った松下中尉は白い歯を見せて私に云った。

「夜襲を認めてくれたよ」

中隊長はもとの位置へ戻っていった。

を恐らく敵は気付いていないだろうと思われた。山の裏側に出た。星の光をたよりに斜面を見上げる。黒々とした土が頂上までつづいている。中隊長が予想した通り山の裏側には鉢巻はなかったのである。頂上の稜線を右に左にと歩いている敵兵の姿が空を背景にしてシルエットとなってよく見える。そののんびりとした動作から判断するとどうやらわれわれの接近をまだ知らな

いらしい。じりじりと山を登りはじめる。敵前三十米くらいまで来ただろう。もう突撃しなければならぬ。私は軍刀を抜いた。それは兵に着剣せよという合図でもある。兵士たちの銃の先につけられた剣が黒い斜面の上で氷のように冷く光った。

ここで少し突撃について説明しておく。かりそめにも必殺の準備をしている敵陣の中へ飛び込むのである。殺される恐れは十分にある。誰しも命は失いたくない。なるべく人のうしろからついていくか、出来ることならやめて

おきたいのが人情であろう。それを軍人精神で克服して飛び込んでいく。この時はずみとなるものがあれば大いに助かる。小隊長が軍刀一閃、号令と共に猛然と先頭を切って突込む。これは不可欠の原動力だがそれでも小隊の精神力が充実していないと兵士があとに続かないで小隊長を見殺しにすることがある。これを突撃頓挫といって、一度そうなる全員が気後れして攻撃は非常に困難となる。

日清日露の戦役では突撃ラッパ「出テクル敵ハミナミナ殺セ」を吹奏して志気を鼓舞した。しかし昭和の兵隊さんはラッパで鼓舞されるほど単純ではなくなったので突撃ラッパは使わなくなった。一番よいのは、飛行機で敵陣地を銃撃又は爆撃してもらう方法である。終った瞬間に突撃する。これは敵が心理的に動揺しているから必ず成功する。砲兵が後方から支援射撃をしてくれることもある。これも味方の砲弾にやられる危険はあるが必ずといってよいほど成功率は高い。しかし飛行

機や大砲はそう簡単に来てくれるものではないのである。それで大抵は歩兵が自力で突撃の機会を作らねばならない。

歩兵の一箇小隊は四つの分隊から出来ている。第一分隊第二分隊は軽機関銃分隊であるが第三分隊第四分隊は擲弾筒分隊といって大砲を超小型にしたようなものを四箇もっている。一人の兵士が片手で運べるほど簡単なものが敵陣めがけてぶっ放せば大砲のような轟音を立て黒煙を吹き上げて炸裂する。敵を殺すことは先ず無理だが一瞬大砲かと錯覚を起させて戦意を失わせるには充分である。これを使って突撃の機運を作り「最終弾と同時に敵陣地に突入すべし」と歩兵操典は教えている。

鉢巻山の裏へまわった私は敵前三十米まで接近したが兵隊さんの顔を星明りで見るとどうももう一つ冴えていない。緊張していることは確かだが恐怖心がありありと窺われる。今度の作戦ではまだ一度も小銃をうつことさえし

ていないのだから敵心に燃えろといっても無理なのだ。

突撃を決意

このぶんでは私が真先に突撃しても見殺しにされる可能性がある。擲弾筒をうつにはもう距離が近すぎるし、それに、いろいろな事情で夜間は擲弾筒は使わないことになっている。

私は水崎上等兵と次山上等兵の二人を小声で呼びよせた。二人とも五中隊の古参兵で沈着且つ勇敢である。私は二人に斜め右に登って行って敵陣に手榴弾を投げよと命じた。うなずいた二人は山腹を匍うようにしてのぼっていく。手榴弾の爆発と同時に敵中に突入する、これが私の計画であった。

日本軍の手榴弾（手投げ榴弾の略でテリウダンと読む。シュリウダンではない）は発火してから四秒で爆発する。だから発火してすぐに投げると敵に拾われて投げ返される恐れがあるので、一、二、と腕を前後に振ってか

ら三で投げることになっている。しかしこれが守られているのは初年兵の演習の時だけぐらいいで戦場では誰でも発火したらすぐに投げる。弾丸雨飛の中でそんな悠長なことはいられないし事実爆発寸前の火をふいている手榴弾をいつまでも手の中で握っているのは気持ちのよいものではないからだ。

敵前で大声

私は二人の上等兵が手榴弾を投げるのを待っていたが、ふとこんなことが頭にうかんだ。二人は当然発火したらすぐに山頂めがけて投げるだろう。それは火を噴きながら山腹をころがり落ちてくるだろう。そしてわれら第一小隊がいるあたりへ来た頃に丁度四秒がたって爆発するのではないか。そう思うと気が気でなくなった。

「おい、待てえノ」

私は思わず大声で叫んだ。

「待つんですか？ 手榴弾待つんですか？」

水崎上等兵と次山上等兵が頂上近くから信じられないという風に焦立たしく怒鳴り返す。

「手榴弾を投げるなノ このまま突撃するノ」

その時、山の上で物凄い動揺が起きた。不意に闇の中から日本語の大声がしかも二カ所で聞えたからである。それも自分達の陣地の後ろからである。

フワフワフワフワフワノ

何を云っているのか分らないが蜂の巣をつついたようだとはこのことだろう、戦争経験のない年少の兵士たちと思われる。叱りつけている隊長らしい人の声もするが聞かばこそ、シルエットになった稜線の上の人影が入り乱れて右に左に走り出した。

この機会を逸しては二度とチャンスは来ないだろう。

「突撃にイ進め」

軍刀をふるって山頂めがけて駆け上がった。小隊全員が「うわーッ」と喊声をあげて敵陣に飛び込む。夜間は敵にこちらの人数を知られるから喊声を

あげてはいけないことになっているが喊声をあげずに突撃せよといっても心理的に無理である。

そんなわけで私も率先して喊声をあげながら敵陣地へ駆け込んでいったらもう敵は一人もいなかった。隊長もろとも大きい方のコブへ逃げていってしまったあとである。

物足りないなどと云ったらバチが当たるだろう。無血占領とは願ってもない幸運であった。敵の逆襲にそなえて陣地配備をする。大きいコブとの間を深い壕が結んでいる。それが子供の頃よくつれていってもらった宝塚の遊園地の滑り台のように見える。戦場では思いがけないことで幼年時代とか故郷の山川とか懐しいものが連想されてセンチメンタルになることがあった。

大きいコブで喊声があがった。二、三小隊が突撃したのだ。チェッコ式軽機関銃の音。手榴弾が相次いで炸裂した。

「敵がまた此方へ来るかもしれないぞ。射撃の準備をせよ。友軍を間違えて撃

つな」

私は一番前へ出て壕の中を凝視していた。然し敵は来なかった。

「おい、一小隊は異常ないか」

足音がして、松下中隊長がおりてきた。

「占領したら懐中電燈を丸う振ること

になってるねん」

中隊長はそう云いながら背伸びするような姿勢になって大隊本部の方へ懐中電燈をぐるぐると廻した。夜の十時頃だった。中隊長のあとから指揮班の兵隊がつづいてきた。灰色の服を着た五人ばかりの捕虜をつれている。

望城坡まで引続き尖兵長

地雷を踏むな

やがて大隊長が無表情な顔で陣地へ上ってきた。寒いのか、六月だというのに外套を着ている。壕の中へ入って地図を拡げると懐中電燈で照らしながら中隊長に命令を与えはじめた。

「ここから南方約十軒のところに望城坡という部落がある。第五中隊は直ちに前進して望城坡南側の高地に進出せよ。道路上の地雷に気をつけろ」

従来の習慣から今夜はこの陣地で眠

るものとばかり思っていた私はうんざりしてしまった。一日中尖兵長をやってきて体はひどく疲れている。そこへもってきて松下中尉が云ったのだ。

「中隊は望城坡に向って前進する。第一

一小隊尖兵、」

「また一小隊ですか」

思わず云ってしまった。

「たまには二小隊か三小隊に……」

「そんなこと云うたか」

中隊長は私のそばへ走ってきて、大

私は一歩一歩注意してあるきはじめた。いつ地雷を踏むかわからない。一人が地雷を踏めばそのあたり四、五名の兵は身体が微塵に砕けて一片の骨さえあとにとどめない悲惨な最期をとげる

ことになる。従って行軍中の兵は前者が踏んだ地面以外のところは決して踏まない。そこだけが安全地帯だ。みんなが夜の闇の中で前者の靴のあとを凝視しながら一歩一歩を踏みしめていく。しかし先頭を行く私には安全地帯がなかった。運を天に任せ、不気味

な土の上を全身の神経を爪先に集中して踏んでいくより仕方がなかった。

尖兵長の胸中

私の前で突然道が二つに分かれた。予期しなかったことである。地図の上では望城坡まで一本道になっている。尖兵長として嫌な一瞬だ。

道を間違えることは尖兵長の恥である。ほかの中隊の兵までが疲れているのに遠廻りさせられる不満から「今日

第五中隊歌

初代中隊長・友松大尉 作詞

一 思えば遠し十四年 聖りの詔かしこみて

軍旗を奉じ堂々と 曠野転戦幾千里

進む二百の健男児 我らは精銳の第五中隊

三 雨も嵐も何のその 決死男児の征くところ

断じて照らす八紘に 亜細亜の正気燦然と

大和魂火と燃える 我らは無敵の第五中隊

(二番省略。作詞者友松大尉は浙贛作戦で戦死)

隊長やほかの兵隊さんに聞こえないように小声の早口で云った。

「望城坡には敵がうじゃうじゃといるらしいんや。君が先頭行ってくれへならんが俺は心配で行かれへんがな」

敵がうじゃうじゃいるから私が行かねばならないとはあまり有難い話ではないが岳麓山を目前にしたこの大事なときに中隊長の期待を裏切っては申し訳ないと思って決意を新たにしてい

山を下った。

あとで分ったのであるが軍司令官横山勇中将は「第34師団(樅部隊)は岳麓山を、第58師団(檜部隊)は長沙市街を、それぞれ六月十六日に攻撃開始すべし」とその日(十四日)の午後五時命令を発していたのであった。その夜大隊長が前進を急いだのは当然であった。

鉢巻山から望城坡までは地図によると一本道である。相も変らず中隊がやとと一列縦隊になって歩ける細い道が地図上では二条実線路となって水田の間をまっすぐ南に向って続いている。

の尖兵長はだれや」とぶつぶつ云い始める。もし同じ将校の名前がそんなとき何度も出てくるようだと「また××少尉か」ということになって「ボッサリ将校」の烙印をおされてしまう。それはプライドを重んずる二十四、五才の若い将校にとっては敵の弾丸に当るよりも辛いことなのである。

この道、違うやないか

かりそめにも古参少尉である。カン米先まで見通せたらカンに頼らなくても道の曲り工合で判断するに困難ではない。しかし月のない夜は見通しがきくのはせいぜい十米である。部隊をとめて一人で百米ばかり走って見えてくるという手もあるがみっともないし危険でもある。第一に体力が消耗してしまつて行軍中に部下より先にアゴを出すことにもなりかねない。そんなことをしなくても何年か作戦を経験していると、こんなとき極度に緊張した神経が

触覚のように延びていって不思議と闇の中を探れるようになるものである。

右側の道をえらんで前進を続ける。歩きながら、時計にならべてはめた磁石の針を何度も見た。夜光塗料をぬった磁石の針は道が間違いなく真南に向ってのびていることを示していた。矢張りこの道が正しかったのだ。私は安堵した。そして二百米ばかり歩いたときだった。

「篠田君、君どこへ行くねん」いきなり後ろから呼びとめられた。

振り向くと大隊副官の三谷中尉がいつものまにか追いついてきている。

「どこへ行くって、望城坡へ行くんですよ」

私は立ちどまって三谷中尉と対峙した。私より一期上の、幹部候補生六期である。

「この道、違うやないか。さっきの左側の道やぞ」

「そんなことありません。方角はきちん」と合っています」

私は腹が立ったので副官にかまわず

に歩きはじめた。

「あかん！」

副官は私の腕をつかんで引きもどした。そんなことまでしなくてもよいと思う。

「篠田君、副官がこない云うとるねんさかい、さっきの道を行けや」

松下中隊長までが先頭に出て来て副官の味方をする。

「この道を行ったら間違いなく望城坡へ出ます。敵前で道に迷うなんて嫌ですよ。この道を行きますよ」

私は主張したが遂に容れられず二人の上官の云う通りに折り返した。みすみす間違った道を前進して必要のない敵と戦火をまじえる、そんな悲劇があるだろうか。然し仕方がないから分かれ道になったところまで戻って反対側の方へとぼとぼと歩き出した。十分ばかり歩いた頃から道は次第に東へよりはじめた。誤りと知りつつも命令通り危険に向って進まねばならない。これが軍隊の掟であるのか。

尖兵長が道を間違えた場合中隊長が

注意するのが普通である。大隊長が先に気付いたら、大隊長が中隊長に注意する。ところが中隊長を無視して副官が尖兵長のいる先頭の位置まで飛び出して来てあっちの道を行けなどと指図するのは前例のないことであった。

道はますます東へ曲りはじめ一時間ばかり歩いた頃にはそれが完全に方角違いであることがもう誰の目にもはっきりして来た。

その時また副官がうしろから追っかけてきた。

「篠田君、止まってくれ。やっぱりさっきの道でよかってんわ」

涼しい顔で、今頃ぬけぬけ何をぬかしてやがるんだ。これが軍隊でなかったら「馬鹿野郎」の一言ぐらいは叩きつけたかもしれない。

「引返すのは無理やろな」

「無理です。水田の畦道を西南の方向に行きましよう。さっきの道の延長上に出る筈です」

副官は苦しうに笑って頷いた。

畦道は歩きにくかった。滑って水田

や排水溝へ転げこむ兵が続出した。夜間は昼間と反対で水が白く見え土は黒く見える。黒いところを踏んでいけば間違いないのだがどうしても錯覚をおこして白いところへ足先が向く。黒いところは穴があいているようで不安なのだ。

望城坡に到着

悪戦苦闘すること二時間あまり、やっと道路上に出た。先程の道の延長であることは確かだ。また地雷に注意しながら一歩一歩を踏みしめて進む。

やがて、前方に黒い森のようなものが見えてきた。森だろうか、丘だろうか、それとも部落だろうか。私は地面の上に伏してみた。空を背景にして前方にある物体の輪廓を見ようとしたのである。どんな闇夜でも空の方が地上の何物よりも明る。空を背景にして見れば地上にある物体の輪廓は逆光線になって必ずつかめるのだ。

前方に見えるのは森や丘ではなかつ

た。凹凸はあるが輪廓がすべて直線的だ。部落の屋根か城壁にちがいないのだ。いよいよ望城坡へ来たのである。「後ろへ通伝。尖兵は望城坡に到着」小声でうしろにいる白洲兵長につたえる。白洲兵長は中西軍曹に、中西軍曹は藤崎兵長に、藤崎兵長は西尾上等兵に、西尾上等兵は田所一等兵に、田所一等兵は足立一等兵に、足立一等兵は角野一等兵に、というふうにして中隊長、大隊長にまで通伝されていった筈だ。

門のようなところへ来た。城門ではない。二本の太い柱を立てた門で扉は開いているようである。村へ入るのに門があるのだろうか。あまり聞いたことがないが門がある以上それを通らなければならぬ。しかし妙な予感がする。背筋に悪寒が走るのだ。

私は子供の頃、裏の畠に出ていてそれに似た気持ちに襲われたことがある。夏なのに背中がゾクゾクして仕方がない。ふと気がつくとも足元で凄く大きな蛇が鎌首をもたげていた。人類は長い

闘争の歴史の間に本能的に天敵の接近を予知する能力を養ってきたといわれる。私は、戦場で生活するようになってからいつの間にか敵に対して一種の予感を抱くようになってきていた。これは私だけではない、古い将兵が様に認める心理現象であった。三叉路に立って進路を決定するカンが働くようになるのも本当だし、ある種の鳥類や動物達と同じように、人間も必要に迫られると方向を探知したり危険を予感したりする力が発達してくるようである。

私はこの門を入ってはいらないと思った。命令は「望城坡南側の高地に進出せよ」である。別に部落の中へ入る必要はない。私は門の事前に左へ折れる細い道があるのに気付きその道を辿って進んでいった。うまく部落の外郭に沿って南側へとつづいているかどうか、それは分らない。運に任せるばかりだ。

家並みがとぎれて右手に池があらわれた。道は池の堤防の上にと続いてい

る。堤防の上を進む。不意に後方で激しい機関銃の銃声があった。中国語で怒鳴りつけるような声が混ってきこえる。敵の指揮官の号令らしい。あとで分ったのであるが第一小隊が門の手前を左へ折れたのに気付かず、中隊指揮班が真直ぐに門の中へ入ったのであった。門の正面に敵のトーチカがあったらしくその機関銃に肩を撃たれて指揮班の中村一等兵が負傷した。先頭を進む者は全身を神経にして警戒しているが後続する者はそれに較べると緊張していてもその度合は浅い。前を戦友がいったという安心感があるから敵の存在を察知する本能もはたらかないのであらう。

池の端まで来た。堤防は池に沿って右へ曲る。即ち南へ曲るわけで眺え向きだ。気をよくして歩いていくと靴の下でメリメリッという音がした。

はっとして思わず足を反射的に撥ね上げる。何か変な物が堤防の上に敷いてある。暗いから何も見えないが屈みこんで手でさわってみると薄い瓦のよ

うなものだ。手を伸ばしてさぐると、指先の届く限り瓦がつづいている。これは踏んでは危険だ。堤防を左側へ下りようと思ったが崖のようになっていて下りられない。右側は池だ。仕方がない。ジャブジャブと池のなかへ入った。腰まで水につかる。左手で堤防の上の瓦をそっと撫でながら進むと三米ばかりでなくなった。再び堤防の上にあがって服からびしょびしょと水をたらしながら前進する。後ろにつづく小隊の兵士もみな私がしたようにしてついでくる。

望城坡南側高地

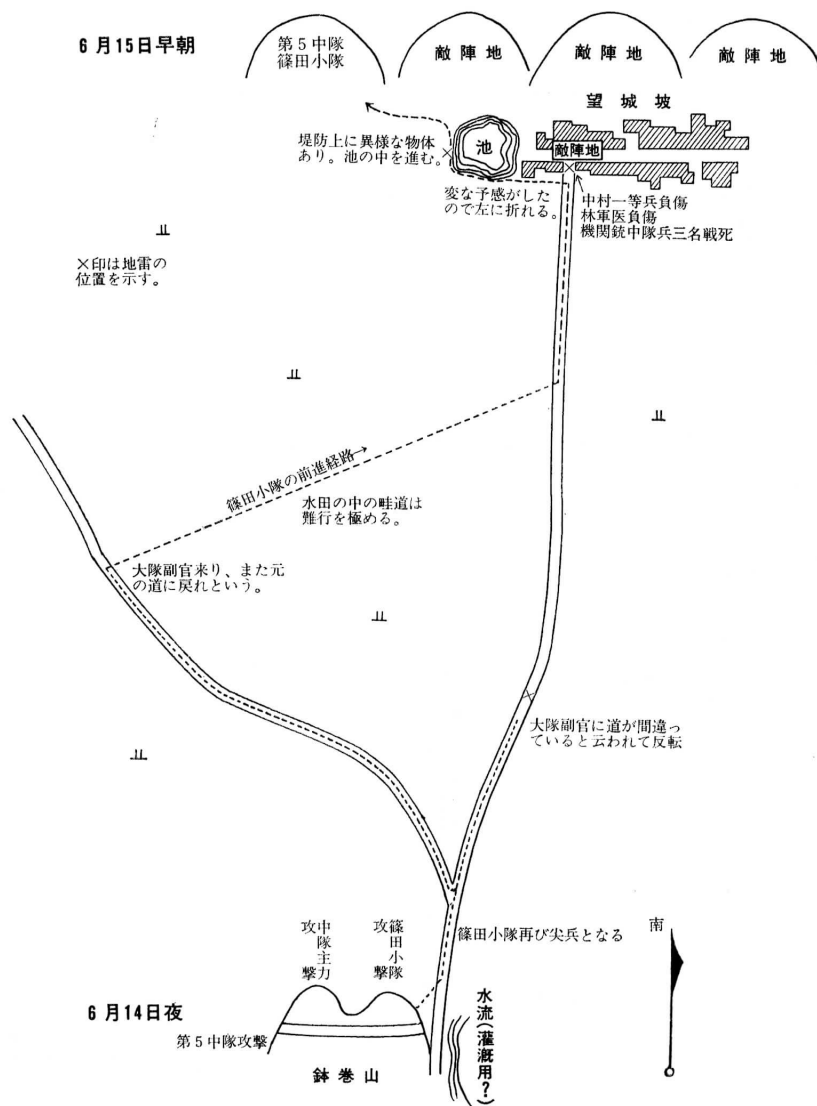
池を廻り終えて望城坡の南側へ出た頃には夜がほんのりと明けはじめてきた。望城坡の規模はかなり大きくて、村というよりは町といった方がよさそうであった。南側には碗を伏せたような高さ百米ばかりの山が黒々と幾つも重なるようにして並んでいる。そのうちのどれでもよいから一つを占領すれ

ばよいのである。敵が山の上にいるのかいないのか全く分らない。寂として静まり返っている。私は廟のかげに兵を集めて小声で指示をあたえた。「いいか、みんな。あの山に登るぞ。そっと鉄帽をかむって、銃に剣をつけろ。ここから頂上まで全力疾走で駆け上るんだ。上から敵が撃ってきても絶対に止まるな。止ったら死ぬと思え。一つや二つの機関銃では小隊は絶対に全滅しない。生き残った者が頂上を占領せよ」

ソレツとばかりに発進した。少し乱暴に思われるかもしれないがこれが未明攻撃の常道だろう。朝の冷気の中を六十名の小隊全員が百米の急斜面に吸いつくようにして息もつがずに十秒あまりで駆け上った。そして頂上に立ってみて驚いた。望城坡から岳麓山一帯にかけて同じ様な形をした山が幾つもならびそれがみな中国軍の陣地になっている。どの山にも交通壕が何本となく掘ってあり灰色の服をきた中国兵がその間を縫うように動いているのが漸

6月15日早朝

×印は地雷の位置を示す。



6月14日夜

く明けそめた光の中に辛うじて見るこ
とが出来た。私がえらんだこの山にだ
け敵はいなかったのだ。私は何かに護
られているような気がして身の引き締
まる思いであった。

伝令を出して陣地占領を中隊長に報
告する。円匙（小型の組立式になった
シャベル）を背囊からはずしてとりあ
えず掩体（射撃用の個人壕）を一人一
箇ずつ造った。岳麓山の山肌に斜めか
ら朝日がさして素晴らしい眺めだ。こ
の地は奈良や京都に似て名利古刹が多
くまた「湘西の古渡より岸に上がれば
喬松徑を挟みながら仙境の如し」と
漢籍にあるのもこの近辺の風景にちが
いない。宋代に建てられたという有名
な岳麓書院もそう遠くない筈である。

芥川竜之介に「湖南の扇」という小説
がある。あの物語も長沙、湘江、岳麓
山周辺を舞台にして展開する。竜之介
が大正年間この地に遊んだときに想を
得たものらしい。竜之介は二十年のの
ち数十万の日本軍がこの地を訪れると
も知らずさりげなくその山水状態を描

写しているが、長沙も湘江も岳麓山も
その筆は実に正確無比である。
それはそれとして私はひどく空腹を
おぼえた。前日（十四日）昼食をとっ
て以来十八時間歩きつづけた鉢巻山
の攻撃もしてきたのである。私だけで
はない、小隊全員腹がへっているはず
だ。中隊は望城坡の中へ入って飯を炊
いているらしい。白い煙があがってい
る。そこで分隊毎に飯盒と米を集めて

岳麓山の前面に進出する

戦争は人生の縮図

望城坡はなかなか堂々とした町であ
った。石で舗装した広い道の両側に煙
草、菓子、菓、加工食品、反物、穀類
などを売る店が大きい看板をにかけて
ひしめくように並んでいる。勿論店の
者は戦争が始まると知って一人も残っ

数人の兵に望城坡へもっていかけた。
しばらくしてその兵の中の一人が引返
してきて曰く、「二小隊も三小隊も指
揮班も民家へ入って飯を炊いて食べて
ます。ほかの中隊も飯を食べてます」
それを聞いて私はアタマへ来た。「よ
ーし」私は立ち上がった。「各分隊一
名ずつ歩哨に残してあとは全部望城坡
へ下りろ。歩哨はすぐに交替してやる
からな」

ではないが平素は随分賑やかな活気
に溢れた商店街だろうと思われる。あ
ちこちの店の土間に腰をおろして各中
隊の兵が旨そうに朝食をとっていた。
一小隊の兵もその店の一つに入って竈
を借用して飯を炊く。

飯が出来るまでの間、私は町の入口
の門のところへもう一度引返して中村
一等兵が負傷した地点を確認した（中

村一等兵はすでに大隊本部の患者收容

班に引き取られていた）。門から十米
ばかり入ったところに堅固なトーチカ
があった。太い柱を何本も打って入れ
ないようにトーチカのまわりを開き、
大きな銃眼が私達が歩いてきた一直線
の道路を真正面から睨んでいる。もし

私が望城坡へ着くまでに夜が明けてい
たらとてもこの道を歩いてくることは
出来なかっただろう。このトーチカが
凄く威力を発揮して重機関銃を撃ちま
くり、それを受けて私の小隊が第一線
となり、望城坡争奪の大攻防戦が展開
されたことと思われる。時間にして約
十五分間の差ではなかっただろうか。

待望の飯が出来た。飯盒のふたに飯
を入れてまさに口へはこぼうとした時
である。道路上を中隊長の伝令が大声
をあげて走っているのが聞こえた。

「篠田少尉殿！ 篠田少尉殿！」

「なんだ。ここにいるぞ」

「さっきの山へもう一度あがって下さ
い。敵が上ってきます」

「誰が云うてはるねん」

「中隊長殿です」

「いっぺん二小隊か三小隊に云うて貰
えよ。昨日の朝から何ぞ云うたら一小
隊やないか」

小隊の兵が可哀そうだと思った。い
くら何でもまた第一小隊に戦闘を命ず
るのは酷である。

「そんなヒマありません。もう敵が来
ます、もう来ます、もう来ます」

「そんなこと云うて、お前見てきたん
か。見もせんと、ええ加減なこと云う
な。俺、嫌やぞ。一小隊はまだ飯食う
てへん」

「そんなヒマありません。もう来ます
もう来ます」

「しゃーない、ほんなら行つたるわ」

全員飯の入った飯盒をぶらさげてま
た山の上へあがった。右の方のどの山
の上にもいつのまにか日本軍が上って
いる。あれから各中隊が攻撃して陣地
を占領したらしい。すぐ右の山は第七
中隊らしい。第一小隊長の寺見豊少尉
（幹部候補生九期）の顔が見える。
前面につづく敵陣地には依然として

灰色の服を着た中国兵がたむろしてい
るが攻撃をしかけてくる様子はない。
この山へ今にも上って来そうだなって
真赤なウソだ。中隊長の伝令に一ぱい
食われたのである。
「ワシらも飯まだやねん」
歩哨に立っていた兵に分隊長が申訳
けなさそうに云っている。

空中にゴーツという異様な飛翔音が
とどろいたのはその時だ。思わず地面
に伏せるとすぐ目の前に砲弾が落下し
た。轟音と共に視界が真暗になり全身
に土砂をかぶる。それから、あたり
一面、日本軍の陣地にも望城坡のぎっ
しり建てこんだ家なみの間にも砲弾が
息づくひまもなく炸裂した。望城坡の
北側、即ち前の夜わたしたちが歩いて
きたあたりには広々とした水田が見渡
されたが的はずれた敵弾は時にはそ
こにも落下して白い水柱を空中高く吹
き上げた。

何分たっても砲撃は衰えようとしな
い。私達が占領している山を目標にし
て敵弾がいちどきに集中してくること

も何度かあった。そんなときには山全体が地響き立てて揺れた。

「おい大丈夫か」

戦友の安否を気づかう声が掩体の中の兵のあいだを飛ぶように交錯する。地響きが腹にこたえて内臓が千切れそうに痛い。断腸の思いとは正にこのことであろう。

昼頃になって、やっと飛来する砲弾の数が減ってきた。敵も交替で食事というところだろうか。それで此方も飯盒をひらくことにする。残念ながら大部分の飯盒は飛んでしまったり泥をかむったりしていて食べられる飯は少くなっていたがそれでも粉醬油をふりかけて久しぶりの食事にありついた。食事中も時々砲弾はあたりに炸裂したがそろそろ馴れてきた私たちは掩体の中であぐらをかきそっちの方は見向きもしないで冷くなった飯をかきこんだ。よく掩体を掘っておいだものだ。地面に匍いつくばっているだけなら飛んでしまった飯盒同様、人間の体も原形をとどめてはいなかっただろう。

中隊本部から連絡に数人の兵が上ってきた。

「一小隊、異常ありませんか」

「異常ない。二、三小隊はどうや」

「五人負傷しました。大隊本部で治療をうけています。そやけどよその中隊では仰山死んでまっせ。大隊本部は運ばれてきた戦死者で一杯です」

中隊で負傷したのは吉良軍曹以下五名であった。私は暗い気持になった。

「篠田少尉殿、えらいことでした」
とほかの一人が云う。「あさ一小隊が飯をたべかけてはった家ね、この山へ上りはったすぐあとに吹っ飛んでしまってますん。ほんまに出はったすぐあとでした」

「……」

私は絶句した。

もしあの家に残って食事をしていたらどうなっていただろう。私は他の小隊に代ってもらおうと手前味噌な考えをおこしたことを反省した。

戦争は人生の縮図である。何十年とたたなければ分らない深遠な真理を戦

争はたった一日に凝縮して見せてくれることがある。特にこの岳麓山攻撃の数日間は私にとって貴重な教訓の連続であった。

梅溪河

松下中隊長も陣地にあがってきた。二人で双眼鏡をのぞきながら敵情を調べる。

前方の丘陵の間を縫うようにして一条の水路がわれわれ日本軍と岳麓山とを距てている。きらきらと空の光をうつしてその幅三十米もあるだろうか。地図に梅溪河と記されているのがそれである。

「敵前渡河になりそうですね。それとも師団工兵が架橋しますかな」

「命令が出るまでどっちになるか分れへん」

「まさかあの橋を渡るといことはないでしょうね」

川の下流の方に小さい石の橋が見える。橋の向うにはまた小高い丘があっ

て橋を渡る日本兵を撃ち下ろすのにまさに格好の地形である。

「水田が多いさかいに戦車隊は参加せんらしいわ」

中隊長は昨夜歩いてきた方をふりかえりながら云った。

「そんなことやろと思ってました。梅溪河をわたったり、岳麓山をよじ登ったり、こんなことは戦車には向きませんね」

「砲兵も来んし戦車もけえへん。大抵航空隊もけえへんやろ」

いつの間にか敵は目の前の丘からは退いてしまったらしく全然姿が見えなくなっていた。多分、岳麓山からの砲撃に巻き添えをくうのを恐れたのだらう。われわれが地面に伏せている間に例の石の橋を渡って梅溪河から南の地区に移動したものと思われる。

「君に云わんらんことがあるねん。鉢巻山から此処へ来る途中に地雷があつてな、うしろから来た部隊の兵隊が五人ほど死んだそうや」
「ほう。どのあたりでしたか」

「二股道があったやろ。あの分かれ道から真直ぐに二百米ほど此方へ来たところらしい」

私はぞっとした。

「そしたら尖兵が引返したあたりということになりましたが」

「そやがな」

と、中隊長も私の顔を見つめた。

「すれすれの所まで行つてたかもしれませんね。それとも跨いで立ってたかな」

「危いとこやった。後ろから来た部隊は当然前衛はあの道を通つたと思つてるさかいに平気で真ン中を歩いて来よつたんやろ」

「それにしても、何故あんな分りきつた道を大隊長は間違つてると云うて来られたんでしょう。副官が来られましたが勿論大隊長の命令なんでしょう。地雷の予感があったものだからわざとあんな風に云つて迂回させられたのでしょうか」

「俺にはよう分らんけど、鉢巻山でつかまえた捕虜が、あの道に地雷がある

と証言したらしい」

私の気持は複雑だった。私の腕をつかまえて、どうしても前進させようとはしなかった三谷副官の気迫は尋常ではなかった。あのとき「地雷」という言葉の口に出せば士気が沮喪したにちがいない。だから大隊長は道が間違っているなど見えすいた嘘を副官に云わせたのではなかっただろうか。勿論これは憶測にすぎない。偶然そんな結果になったというだけのこともかもしれない。ただ、それによって、私の命が助かったということだけは確かなのである。

午後になってまた砲撃は激しくなった。おまけにアメリカ軍の戦闘機までが五機ばかり現れて日本軍陣地の上を舐めるように飛びながら機銃掃射を浴びせていった。

砲撃は夕方の六時頃まで殆ど絶えずなく続いた。炸裂音で鼓膜がおかしくなつたらしくお互いに物を云つても口ばかりが動いているようで声は一向に聞こえてこない。炸裂音の方もだんだ

ん聞こえにくくなってきて、砲弾がすぐそばで爆発してもブリキ缶を敲いた位の音にしか感応しなくなってしまうた。

そのとき奇妙な事が起った。今まで殆ど絶え間なく続いてた砲撃が急にピタリと止んだのである。日本軍陣地は突如不気味な静寂に包まれた。静寂に馴れていない耳はジーンと鳴りはじめてかえって兵たちは不安そうに顔を見合わせた。

私は聴覚が異常をきたしてはいたが空気を震動させて伝わってくる航空機の爆音を不思議に聞きとることが出来た。ゴッゴッゴッゴッとしたそれは大気を圧するかのような重量感で後方から次第にしかも着実に近づいていく。

「友軍機だ！」

私は思わず大声で叫んだ。まだ機影は見えないが、アメリカ軍の飛行機なら水冷式のエンジンを使っているのでフワーンフワーンという軽いプロペラ音がする筈だ。いま聞こえてくるのはまさに日本軍の空冷式のエンジンの音

なのだ。それもかなりの多数と思われる。二十機や三十機ではない。これは夥しい数の空軍が近づきつつあるに違いない。双眼鏡で北の空を見る。すると何と驚いたことに二個戦隊、翼に日の丸をつけた二百機の日本空軍の勇姿が私の双眼鏡の中へ飛び込んできたのである。

「来たぞ、来たぞ、航空隊が来たぞ。陸の荒鷲が来たんだ！」

私は、興奮しないではいられなかった。文字通り雲霞の如き機影はたちまち肉眼でも見えるほどに接近し兵達はそのを迎えて小躍りして喜んだ。当時空軍は荒鷲部隊と呼ばれて日本軍の花形であった。

爆音をどろろかせて日本軍陣地の上まで来たその翼の赤い日の丸がジーンと涙でにじむほどに印象的であった。間違って爆撃されてはたまらないからあちこちに日章旗をひろげて目印にする。朝から敵の砲撃下に身をすくめていた私たちは何時間ぶりに全身を伸ばして陣地の上に突立ち力一杯手を振

って航空部隊を激励した。痛恨の岳麓山に雨のように爆弾が投下される世紀の大スペクタクルが今にも眼前に展開すると思ったからだ。

やがて荒鷲部隊は岳麓山の稜線にそって旋回をはじめた。今か今かと手に汗を握って岳麓山の上空を見つめる地上部隊の将兵。しかしその期待は空しく裏切られて航空隊は一個の爆弾も落さないでそっけなく引返していったのである。

わらわし部隊だ

日は暮れかかっていた。砲撃はやんでいたが私たちの胸の中には寒々とした風が吹きぬけていた。荒鷲部隊は何故引き返したのだろう、こんなに地上部隊は苦戦しているというのに。

山を下りて中隊のいるところへ行ってみた。中隊の兵たちはみなやつれた顔をして反対斜面の死角になったところに無言のままですわっていた。

大隊本部へ行ってみた。望城坡の民

あった。

「第五航空軍はなぜ何もせずに帰ったんですか」

私は副官にたずねた。

「師団司令部から無線で漢口へ連絡したらな、遅う来すぎて敵陣地の様子がよく見えなんだという返事や。明日のあさもう一ぺん来るそうや」

「馬鹿にしていますね。われわれが一ト月かかって歩いてきたところを奴らは十分間で飛んでくるんでしょう。それが遅う来すぎたとは何事ですか。兵隊は荒鷲やないワラワシや云うておこってますよ」

雨が降ってきた。大砲を撃つと雨が降ると昔から云われているが、あれだけ撃つたら雨になっても不思議ではないと思う。

それにしても、また砲声が始めた。日本軍の重砲だという者もいる。

どうも私には信じられない。岳麓山から撃ってくる砲声と同じようにしか聞こえない。しかし日本軍陣地に少しも砲弾が落下しないところをみれば本当

家に入ると砲撃的になるので、大隊長以下村はずれの牛小屋みたいな納屋の中に入っていた。三谷副官が私を見て、

「うへえ、君、生きてたんか」

と幽霊でも見るような表情になっていう。沢山運びこまれた戦死者の中に私と同じ革脚絆をつけた将校の遺体がまじっていたというのだ。顔がつぶれているので誰か分らない。多分篠田少尉だろうということになって「ええ男を死なしてしもうたなあ」と皆で私の死を惜しんでいたのだという。

小屋の奥の方に沢山負傷者がいて林軍医中尉、岸川軍医少尉が衛生兵を指揮して大奮闘である。林軍医は右眼右腕をやられて丹下左膳みたいになっっていたが自分は休息するひまもないらしく大声で衛生兵に指示を与えながら治療に専念している。

林軍医にきくと、戦死した、私と同じ革脚絆をつけていた将校というのは歩兵砲中隊の川口清志少尉であった。作戦直前に召集で来られた四十才くら

いの人で私はゆっくり話をしたこともなかったがあの年令では奥さんも子供さんもあったことだろう。私は心から冥福を祈らないではいられなかった。林軍医の話をつづけると川口少尉は歩兵砲の観測隊長として奮戦中に敵砲弾の直撃にあわれたもので同時に別所軍曹以下九名も戦死したそうである。また望城坡の入口で第五中隊の中村一等兵が負傷したが（右肩貫通銃創）、衛生兵が手当てしてもどうしても血が止まらず軍医を呼んだ。林軍医が出ていって止血を終った直後に、前進してきた第二機関銃中隊の兵が地雷を踏み目の前で三人が戦死した。そして軍医もその地雷の破片で右目右腕を負傷したのである。担架で運ばれていった中村一等兵はその時は地雷の破片にあたらずにすんだが後に敵砲弾の直撃をうけて彼も戦死したそうである。

なお林軍医は無理をして負傷者の治療に専念していたが自分の傷が悪化して遂に野戦病院入院、部隊に復帰するまで一カ月半もかかるという重傷で

に山崎清次少将がひきいるという日本

軍重砲が到着したのかもしれない。

咆哮する巨獣、岳麓山

敵、卑劣な戦法

再び中隊のいる崖の下まで戻る。兵は雨にうたれながら砲声におびえたように肩をよせあって眠っている。

「えらい負け方や。もうこんだけ負けられたらしまいや」

私が聞いているとも知らず伍長勤務の五年兵の兵長が隣の者と話をしている。日本兵がこんな弱音を吐くのを聞いたのは始めてである。作戦要務令にうたわれている「必勝の信念」が脆くも壊滅しようとしているのである。何くそ、と自分に云いかけながら陣地上に上って壕の中で浅い眠りに入った。翌朝、雨はあがって空は青く澄んでいた。その空気を震わせて岳麓山は再

び喰りはじめた。第五航空軍の二箇戦隊が飛来してきたのは六時半頃であった。然しまたもや陸の荒鷲は一発の爆弾も投下せずに帰っていった。当方からの無線電信に答えて、「岳麓山にはまだ朝霧が垂れこめていて目標が確認出来なかった」という返事が来たそうである。つまり今度は早く来すぎたというのである。ワラワシの声さかんに起る。

砲弾雨飛。遂に小隊にも負傷者が出る。私もすぐ横の谷に敵弾が炸裂した瞬間左腕上膊に激痛をおぼえた。見ると服が破れて血が吹き出ている。「衛生兵ノ」と叫ぼうとしたが手や足がとんだ者が多いという現状でこんな掠り傷で騒ぎ立ててはみともないという気がして思いとどまる。一滴の赤チン

がどれだけほしかったか分らないが唾をぬって我慢した。ところが不思議なことにそれで血がとまってしまった。傷のほうを気をきかせてくれたという感じである。紐で腕を首から吊るすと痛みの方も楽になった。

午前十時、第五航空軍三たび飛来。

地上部隊は日章旗をひろげて日本軍陣地であることを明示する。さあもう霧も晴れあがって爆撃を遮るものは何もない筈だ。沈黙してしまつた岳麓山。

その稜線に沿って低空を飛ぶ偵察機。爆撃機は速度を落とし、何列かの縦隊となった。決定的瞬間が刻々と迫ってくる、と思ったのはまたしても地上部隊の希望的観測にすぎなかった。彼らは今度も逃げるように遠く迂回してわれわれの上を飛ぶのをはばかり北の空へと消えていったのである。

ワラワシ部隊への嘲笑は遂に怒りにかわった。傷ついた腕を三角巾で吊りまた跛をひいた兵士たちが地上を血に染めて苦痛に耐えているときに航空隊の行動はあまりにもお粗末すぎはしな

いか。一体本気で戦さをしているつもりなのか。

約二十分ののち樁部隊と第五航空軍との間に次のような無電のやりとりがあった。これは命令受領者の松田兵長からきいた情報である。

問 何故に岳麓山陣地を攻撃されざりしや。

答 岳麓山上には既に敵影なし。

問 信じられず。昨日来岳麓山からわが陣地への砲撃しきりなり。

答 岳麓山上には到るところ日章旗ひろげられありて我を歓迎す。

その返答は私達を驚愕させた。敵は何枚もの日章旗を予め用意していて恰も日本軍陣地の如くに見せかけ我が航空隊の爆撃をまぬがれたのである。汚いやり方だ。そんな戦法は古今の歴史にも未だ例をみないところである。いかに戦争とはいえずから人間性に基いたルールがある筈だ。

昼になったが飯をたくことは出来なかった。炊煙をあげると砲撃の目標になるからだ。ただ有難いことに正午近

くになると前日同様敵の砲撃が閑散になってきた。

中隊長の伝令が陣地へ上ってきた。「篠田少尉殿、中隊長殿の命令であります。今夜二十一時大隊は梅溪河を渡河して岳麓山攻撃を開始します。第一小隊は中隊の第一線になってくれとのことであります」

私はまたかと思った。しかし考え直して、

「承知したと中隊長殿に伝えてくれ」と云った。

人間の運命と死

伝令はちょっと安堵した様子になって雑談をはじめた。

「望城坡の東側に池がありましたでしょう。あの堤防の上でさっき地雷が爆発したんです。乗馬小隊の将校の人があの堤防の上を連絡か何かで来られましてね、池のかどのところを此方へまがられたと思った瞬間、馬が地雷を踏んだんです。物凄かったです。馬もろ

とも吹きとばされました」

私にはすぐ分った。あの瓦のようなものが敷いてあったところだ。かなり大きな爆発音がしたはずだが砲弾の炸裂音にまぎれてか私たちは気づかなかつた。伝令が帰ったあと私は一人で考えていた。この二日間に私は何度命が助かったことだろう。鉢巻山を出発したあと、副官がわざわざ追っかけてきて、正しい進路を誤っていると奇妙なことを云って引返させていなかったら私は数分のちに、否、数秒のちに地雷を踏んだかもしれないのだ。それから望城坡の入口で左へ折れたこと。もしまっすぐ進んでいたらひとたまりもなく敵トーチカの餌食にされていたにちがいない。そしてあの池の堤の上の瓦のようなものを敷いた場所。また、駆け上った山だけに偶然敵がいなかったこと。朝食をとろうとした家が陣地へ上った直後に爆破されたこと。そのほか私自身が気付かずに見えざる力で護られていたことが数限りなくあったことだろう。いや数限りなくなどという

表現は間違っている、四六時中、絶えず護られつづけていたような気がするのである。

勿論私は厳肅な運命に甘えてはいけなと思う。多くの戦友が死んでいるのである。私だけに護られる資格のある筈がない。しかしまた、絶対に、この厳肅な運命に対して不遜であつてもならないと思うのである。人間の智慧や折りを超越した力にあくまでも敬虔でありたい。

陣地の後方に何か歓声のようなものがあがるのがきこえた。振り返ると例の師団山砲がやっと到着したのであつた。到着したといつても二門だけだが敵の目をさけるためか馬を使わずに兵が分解して運んでくる。

しばらくしてその山砲隊の伝令が私のところへやって来て云つた。

「隊長殿がこの陣地を譲ってくれと云つていられます。目標を的確に撃つ必要がありますので一番良い陣地を優先的に使わせていただきたいのであります」

私たちは山を下りて反対斜面に身を伏せた。山砲の一門が引きあげられていく。

「我々が来た以上はもう大丈夫だ。何処を撃ってほしい？ さあ、お望みのものを撃ってやるぞ」

将校が私の小隊の山中兵長に云っている。遅れてきたにしては馬鹿に鼻息が荒い。

「うん、あのへんの松は色が赤い。枯れているのだ。監視哨の位置をかくすために立てかけたものと判断する。あのド真ん中へ一発お見舞いするか」

誰に聞かせるためか知らないがよく口のまわる人だ。目標と距離を示して早く撃てばよいのと思う。然し苦しい行軍のあと疲労困憊しているにも拘らず休憩もせずですぐ射撃にとりかかる熱意には心をうたれた。

号令一下、岳麓山の頂上に初めて日本軍の砲煙がパツと上つた。ところが期待に反して四日前の演習で見せてもらった時よりも砲煙が一まわりも二まわりも小さく思われた。そして更に悪

いことには、その直後、敵の砲火が一斉にこの陣地に集中したのである。地震の如く落雷の如く、まさに泰山鳴動して黒煙のために太陽が一時視界から消えた。やがて硝煙が薄れていくと目の前にくの字に曲げられた砲身と千切れた砲車のかげらが転がっていた。将校も兵もみな戦死していた。ここまで砲を運んできた労苦は殆ど報いられることなく潰れたのである。

壮烈な最期とか名譽の戦死とかいう粉飾は戦場にははじめから存在しなかつた。戦死者は野球でアウトになった選手と何ら変わるところなくフィールドから姿を消すのである。人の死を冷やかに正視するこの態度は、戦後三十年物質文明の中に生れ育ってきた人達の目には悪魔のそれとしか映らないであろう。然し、人間の精神はこのような窮極の地に立たされた瞬間、はじめて目覚めるものをもっている。物質文明では得られない、運命に対する敬虔な態度というものを教えられるような気がする。それは東洋の哲学の前提とな

るものではないかと私はひそかに思っているのである。

荒鷲、四たび飛来

十二時半頃（六月十六日）、中隊の命令受領者である松田兵長が陣地へあがつてきた。

「重要な命令がありますのでお知らせに参りました」

いつもは大隊本部から帰ってきてでも中隊長だけにしか命令を報告しない松田兵長が特に小隊長のところまでやってきたのである。通信紙をひろげて読みあげる。

一、第五航空軍ノ二箇戦隊ハ本日十四時岳麓山ノ敵陣地爆撃ノタメ飛来ス一、各中隊ハ日本軍陣地ナルコトヲ明示スルタメ、少クトモ一箇分隊ニツキ一ヶ所、日章旗ノ右横に幅三十糎長サ一米ノ白布ヲ置クベシ

一、友軍機ハ日章旗ノミヲ拡ゲアル部隊ヲ敵ト看做シテ爆撃スルヲモツテ対空標識ヲ誤ルコトナキヨウ各指揮

官ハ一兵ニ至ルマデ徹底シオクベシ「なるほど。フンドシだね」

私が云うと松田兵長も笑いながら領いて陣地を下りていった。幅三十糎長さ一米の白布のことである。よく考えたものだ。これだったら如何に敵の砲撃下にあつても調達は容易である。各分隊長を集めて指示する。

「習慣になつていいるからうっかり日章旗だけを拡げる奴がいるぞ。喧しく云つておかないと危い」

しばらくして、私は標識が正しく置かれていいるかどうかを調べるために陣地のすみずみまで見て廻つた。各分隊長の位置に、日章旗はフンドシと並べて整然とおかれていいる。さすがにフンドシはみな真新しく、生命の危険にさらされたさなにも国旗に対する尊敬の念が立派に表明されていいるのを見て襟を正す思いであつた。しかし岳麓山の上から望遠鏡で敵がこの新しい標識を見ていいるとしたら何か感づきはしないだろうか。私はふとそんな気がして標識を岳麓山から見えない斜面に移動

させた。この配慮は恐らくどの陣地の指揮官もしたことと思う。（中国人はフンドシを使わない。だから敵が急にそんな白布を多数調達しようとしても無理なのだが、戦争ではどんな時でも企図は厳重に秘匿しておかないと思わぬ不利を蒙ることがあるのだ。）

このようにして正念場の二時は刻々として近づきつゝあつた。そして、運命を予告するように、敵の砲撃は次第に散発となり、例の不気味な静寂が日本軍陣地を包みはじめた。空も山も兵士たちも、湖水の底に沈められたような、溺れてしまひそうな苦しい静寂である。やがて、その静寂を確かめるかのように、遠雷を思わせる爆音が後方の空からつたわつてきた。わが第五航空軍二百機の空冷式エンジンの爆音である。時計を見ると針は正しく午後二時を指していた。

双眼鏡で北方の空を探す。一機、二機、とレンズの中に飛びこんできた機影はまたたくうちに数十機となつて黒く視界をうずめつくした。やがて轟々

と天地を圧する爆音と共に編隊は私たちの陣地の西方に進出してきた。どの陣地からも、じっと唇をかみしめた日本兵の目が、無言でそれを見守っている。もう始めの時のように、躍り上がって手を振ったりする者はいなかったが、今度こそ、という期待が祈るようなまなざしとなって、静かに翼に日の丸をつけた空軍の姿を見守りつづけていた。

空軍はいつのまにか数列の縦隊となり、隼（はやぶさ）、飛燕（ひえん）、疾風（はやて）などの戦闘機がスピードを増して先頭に出ていった。戦後の今日もなお、プラモデルやリモコン模型機にその花やかなイメージをとどめている、世界に誇る日本の精鋭機である。しばらく間をおいて爆撃機があとにつづく。

遂に彼らは岳麓山の上空にさしかかった。かなりの高度である。鳴りをひそめた岳麓山要塞。翼に日の丸をえがいた日本空軍。先頭の戦闘機が機首を下げた。さっと斜めに敵陣地に突入す

るとバリバリッと銃撃を加えて、あわや山頂に激突するかと見えた瞬間、鋭い角度で機首を再び上に返した。うしろの爆撃機に爆弾の投下目標を示したのである。爆撃機は、丁度その目標の真上に来るまで糸を引いたように同じ高度を維持して水平に進んだ。

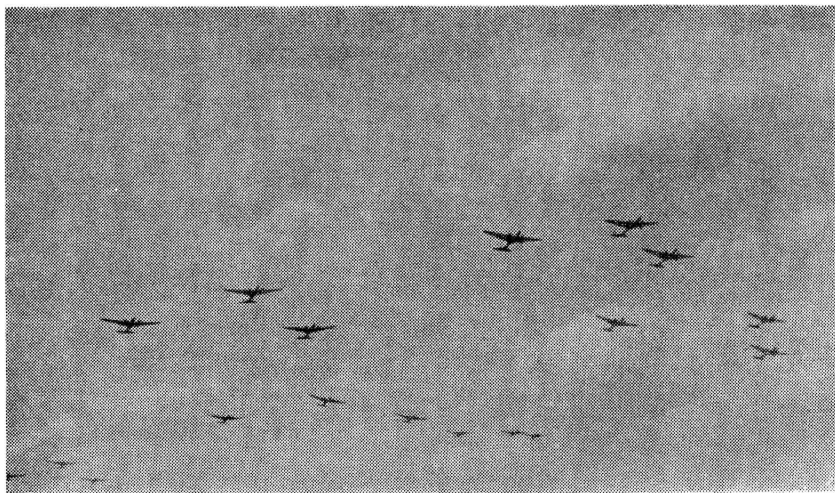
そして目標の真上まで来ると、突然石のように、まっすぐ目標めがけて急降下した。墜落かと疑うほどの思いきった急降下である。そして、まさに目標にぶつかりそうになったとき、爆弾だけが投下され、機体は鮮やかに身をひるがえして飛び去っていた。それは稜線すれすれに、燕のような早業であった。空を引裂くように稜線から黒煙が噴き出し真昼の空に赤い火柱が立上った。二番機が三番機がそれにつづいて同じ動作を繰り返した。他の縦隊もまた別の攻撃目標に向かって同じ方法で爆弾を投下していった。

上空を飛びながら爆弾を投下するのでは、高度と風向きと爆撃機が飛んでいるそのスピードを考慮しなければな

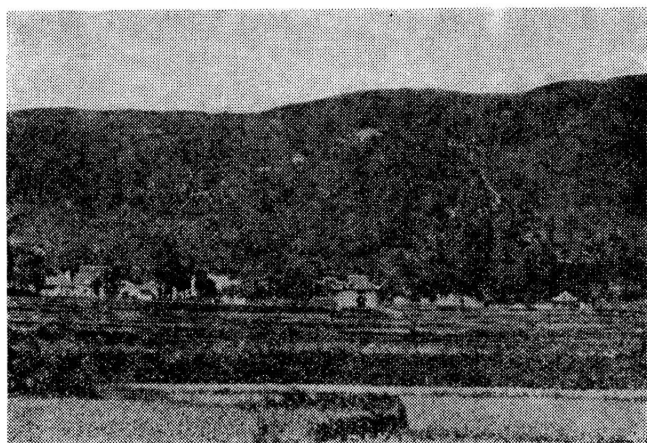
らないから爆弾投下のタイミングが非常に微妙になってくる。然し急降下爆撃だと明らかに危険は伴うけれども命中は絶対に確実である。航空部隊は敢て危険を冒してこの攻撃方法をとったのである。攻撃精神が旺盛であったことは勿論であるが、蓋し歩兵部隊を前にして荒鷲の本領を発揮してみせる絶好のチャンスでもあっただろう。まして再三にわたるエラーの後である。

岳麓山には五ヶ所にわたって黒煙が濛々と天高く立上り宛ら怒り狂う噴火山の様相を呈しはじめた。もう爆弾投下は終わっているのに黒煙の中から何度度も新しい爆発が起りそのたびに真赤な火炎が噴出した。多分弾薬庫が燃えているのだろう。

爆撃を終った第五航空軍は、今度是我たちの陣地の上空を、ゆっくりと低空で帰っていった。銀色の翼と赤い日の丸が手を伸ばせば届くようなところを通っていく。感激した地上部隊の将兵たちは総立ちになり夢中で手を振り日章旗を振ってみせた。誰もが二日にわ



左上



荒鷲部隊の編隊
岳麓山

たる苦戦を反芻していた。多数の戦友を失い部下を失い自らも傷ついた地獄の二日間であった。聞こえないと分っていないながらも「有難う、有難う」と絶叫する者もいた。航空機はそれに答えるように左右の翼を交互に振りながら帰っていった。彼らも地上部隊の労苦に対して感謝の気持をあらわしたものと思われる。翼を振るのは平素なら地上部隊の連絡に対して承知したという合図なのである。

爆音は次第に北の空に遠ざかりやがて機影も見えなくなった。それ以後は私たちの戦線にあれだけの数の空軍が姿を見せることは遂になかった。終戦当時日本には殆ど航空機が残っていなかったことを考えると、あの二百機のうちの大部分が、のちに沖縄その他南方の海上で自爆したか特別攻撃隊に参加したものと思われるのである。

荒鷲部隊が去ったあと、敵の重砲は殆ど無力化した。砲が全部破壊されたわけではないだろうが、監視所を破壊されて目標を指示するすべを失った敵

は、たまに撃つても盲撃ちしているらしく、砲弾は途方もない水田の中へ飛び込んでいった。私たちは、しかし、四十時間ぶりに味わう平穏の中で、徒らにリラックスしていたわけではない

行く手を阻む梅溪河

第七中隊は石の橋へ

空軍は岳麓山を爆撃して巨砲の威力を消滅してくれたけれども中国兵そのものを消滅したわけではない。機関銃や小銃をもった敵兵は堅固な陣地に倚っていて、われらの行手から撃ち下ろしてくるのに違いなかった。その夜は山岳地帯での手榴弾戦や白兵戦も覚悟しなければならなかった。

あたりにはずで夕闇がせまっていた。私は中隊長に呼ばれて指揮班の位置へおりにいった。望城坡の部落に近

のである。出来たら一眠りしたいところであったが、その夜九時に迫っている梅溪河の敵前渡河とそれにつづく岳麓山夜襲の準備に忙しかった。

い崖の下である。中隊長のところには既に第二小隊長西川准尉、第三小隊長仲森曹長が集合していた。

「あっ、篠田君、君やられたんか」

松下中隊長は首からつった私の左腕を見て大声を出した。

「いや、大したことはないんです」

「そんなことはないやろ」

「砲弾のかげらがかすただけです。かすりきずです」

「そやけど片手で突撃は出来んぞ。西川准尉、今夜は第二小隊が第一線に出てくれ」

「いや、行けます。肝心の岳麓山に入

るんじゃないませんか。今頃になって第一線をゆずるのは嫌ですよ」

私は本気で抗議したが中隊長は認められなかった。

それから中隊長は地図をひろげてその夜の攻撃計画を説明しはじめた。

梅溪河には一つの石橋がかかっている。ほかに橋というものはない。敵は

日本軍がその石橋を通過してくると予想して、対岸の高地から完璧な射撃準備をいっているにちがいない。大隊長山口少佐は敵のうらをかいてその石橋は

渡らず、遙か上流の一地点で夜陰にまぎれて渡河しようと決心していた。梅溪河は大阪の北方を流れている神崎川くらいの小さい川で、川幅はよくあって三十米ばかりと思われたが、勿論歩いて渡れるしろものではない。

大隊長は配属の工兵隊長に命じて、昼の間に、すでに架橋地点の偵察を完了させていた。急造の橋をかけて歩兵を渡すのである。勿論昼間から橋をかけておいたのでは敵に企図を見破られてしまう。二十一時に歩兵が渡りはじ

めるその直前に、敵に気付かれぬように、闇の中で手際よくかけなければならぬ。工兵小隊長は昼の間に、あのすさまじい砲撃のさなかを、全身頭の下から足の先まで草や木の枝で蔽ったのち、架橋が比較的容易に出来そうな地点を探し出してきたのであった。

その夜の大隊の第一線は第六中隊が命じられた。中隊長は幹部候補生五期の土肥正雄中尉である。

しかし、日本軍が石橋を通過せぬと分ると、敵は当然他の方面の警戒に全力を注ぐことであろう。とすると、工兵隊の架橋作業が発見される可能性が十分にある。こんなとき陽動作戦が必要になってくる。敵の判断を誤らせるために、ことさらに別の行動に出て敵の注意をその方にひきつける作戦である。大隊長は一箇中隊に石橋を通過させるか、或いは実際には通過させないまでも、恰もまさに通過するが如き行動を起させようと決心した。石橋のすぐ手前に高地がある。そこにいた敵はすでに昼のあいだに撤退したように見

えた。大隊長山口少佐は第七中隊に、二十一時を期してその無名高地（地図上に名称が記載されていない要点をこのように呼ぶ）に進出せよと命じたのである。第七中隊長山崎吉一中尉（幹部候補生四期。現役志願）は常德作戦の前までは大隊副官をつとめていた人で生粋の軍人氣質の持主であった。

渡河点で待機

いよいよ日が暮れてきた。敵がこちらの行動を観察出来なくなるのを待って私たちは第七中隊に別れを告げるとそっと陣地をはなれた。丘陵のあいだの細い道をとって渡河点に向う。月の出はおそろしく、忽ちあたりは夜のとばりに掩われてしまった。先ず第六中隊が進み、大隊本部、第二機関銃中隊、第五中隊、第八中隊の順でそれにつづく。口をきく者は誰もいない。「負傷しても衛生兵を呼んではならない。敵情が緊迫しているから戦友と雖も介抱のために後に残ることは許さな

い」出発のときに中隊長が云った言葉が誰の心にも重く沈んでいた。決死隊ということなのだ。渡河する順序は先頭でなくても、向う岸につけば中隊毎にばらばらになって、さらに小隊や分隊に分れて複雑な岳麓山の地形の中へ進入しなければならぬ。頂上までには無数の敵陣地が待構えているのだ。

先頭が渡河点に着いたらしく前進がとまった。橋がかかるまで細い道の上に腰を下ろして待機する。

「工兵隊が通るから道路脇によつて道をあけよ」

うしろから通伝が来た。おやっと一瞬変が気がした。工兵隊はてっきり先頭にいっても架橋作業にとりかかっている頃だと思っていたからだ。丘陵の斜面に背囊をもたせかけていると工兵隊が足音をしのばせてやってきた。空をバックにして見上げると黒い大きいものを幾つも担いでいる。折畳み鉄舟だろうか。戸板だろうか。折畳み鉄舟だったら岸で組み立てて川に浮かべ鎖で結び合わせてその上を渡るので。し

かし戸板だったらまず水中に杭を打ってその上に橋桁をわたすのだからかなり工事は困難になると思われた。

工兵隊が通ったあと、あたりは再び静かになって前進の命令が伝えられてくるのを誰もが観念したようにじっと待っていた。私は正直云ってあまり気がすまなかった。鉢巻山を攻撃した時のようなファイトがどうしても湧いてこない。対岸の地形も分らないところを敵前渡河する不安感が全身を掩ってはなれなかった。禁じられていたからではあるが全員が無言である。

作業が手間どっているのだろうか。二時間以上そのようにして過ぎていった。そしてあたり一面の闇と静寂がその不安感をますますつららせていくのであった。作業が手間どるといっても少し長すぎはしないか。二十一時に渡河する予定なのに夜光時計の針はすでに二十三時をまわっているのである。そのとき悲劇が起ったのだ。突如、闇を貫いて激しい銃声が起った。激しい。実に激しい。前方の渡河点からで

はない。石橋の手前の、例の無名高地の方向である。重機関銃をまじえた狂ったような集中射撃である。第七中隊が撃たれている。攻撃軍があんなに激しく射撃をする筈がない。撃っているのは敵に違いないのだ。しかも敵がいなとされていた無名高地に於てである。

息づくひまもない集中射撃が、何分も何分も、止まるところなく続いた。

只事ではない。夜間とはいえ、あれだけの銃弾を受けて一箇中隊が耐えぬことが出来るだろうか。誰もが闇の中で第七中隊の運命を気遣っていた。

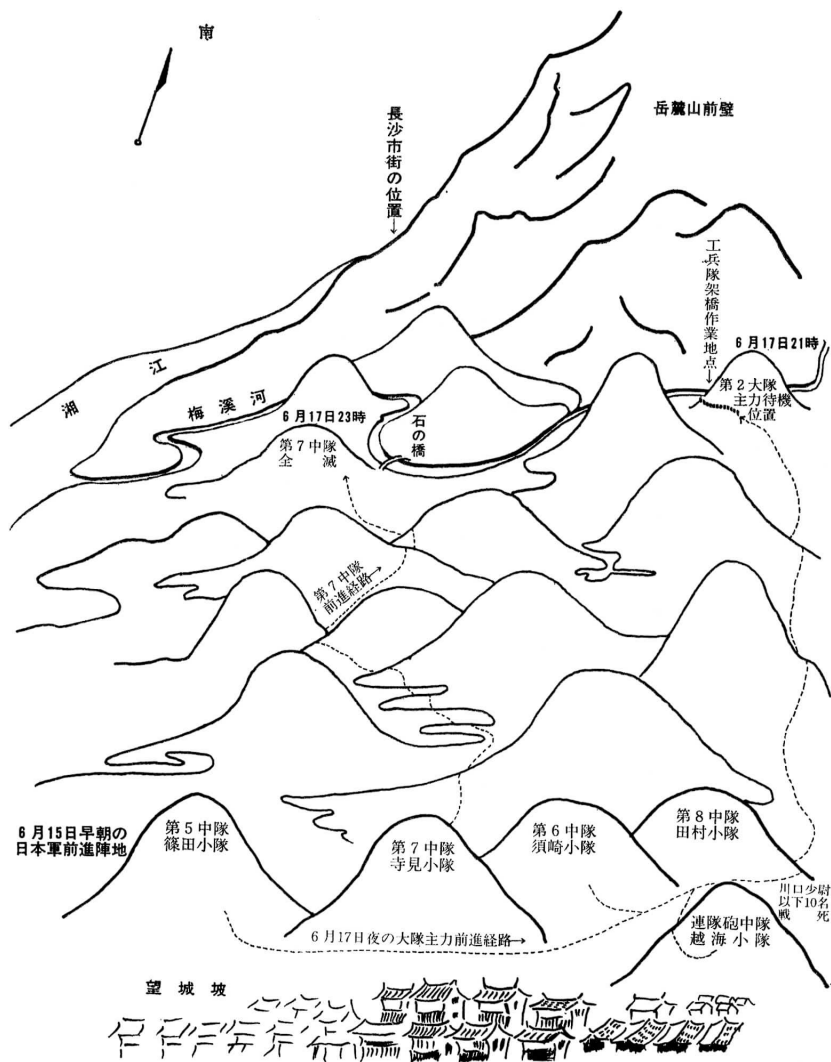
やがて夕立がやむように銃声は単発となり、そして遂に静寂が再び闇の中にひろがってきた。不気味な静寂であった。

そのとき。

「工兵隊が通るから道をあけよ」

不可解な通伝がその不気味さを裏付けるかのように前方から風のように流れてきた。

「何だろう？」



「どうしたのだろう?」

思わずささやく声があちこちに起り
そして私たちがつくった狭い空間を工
兵隊が二時間前と同じように黒い大き
いものを担いで戻っていった。工兵隊
に聞いかけける者もいたが工兵隊は一言
も口をきかず黙々と影のように去って
いった。何か予期しないことが起った
のに違いなかった。

十分ばかりすると中隊長の伝令が私
のところへ来て小声で告げた。

「引揚げです。第一小隊はもとこの陣地
へ戻って下さい」

「どうしたんだ?」

私はたずねた。

「分りません」

伝令は第三小隊の方へ小走りに急い
でいった。

何も知らされなかった。そして私た
ちは、もう帰ってこないつもりで二時
間前にあとにしたその陣地に、また舞
い戻ってきたのである。悪戦苦闘した
陣地であったが、二日間しがみついて
きたその小山にはほのかな親しみをさ

え覚えるのであった。

壕の中で星空を仰いでいるところへ
第七中隊は全滅したという噂がひろが
ってきた。そんな風にして兵から兵へ
とどこからともなく伝わってくる情報
は大抵あたっていることが多かった。

細い上弦の月が、立哨している兵の背
後に角のようにのぼるのを見ながら、
私は山崎吉一中隊長や寺見豊少尉の生
死を思った。その人たちは本当に死ん
だのだろうか。第七中隊にはまた半島
(現在の韓国或いは北朝鮮)出身の特
別志願兵武山炳夏上等兵もいるのであ
る。

小隊の兵は壕の中で眠りはじめた。
あちらこちらから静かな寝息がきこえ
てくる。しかし私は眠ることが出来な
かった。どんな作戦の齟齬があったの
だろう。そして、無名高地にいた敵は
その後どんな行動を起しているのだろ
う。この陣地を襲撃してくる公算はな
いのだろうか。

私は陣地の前端まで行って睥をこら
した。しかし、無名高地も梅溪河も、

山攻撃に於ける第二大隊の任務は事実
上終了したのである。

私は明けそめていく岳麓山の山肌を
ながめていたが、また思ひは第七中隊
の上に戻っていった。

山崎中隊は本当にあの高地を攻撃す
る必要があったのだろうか。主力の攻
撃を敵にさとせぬために犠牲となっ
て仕掛ける悲壮な攻撃、これは陽動作
戦の中でも特に助攻作戦とよばれて兵
法にも説いているところである。しか
しこの場合、大隊長はその高地に敵が
いないと判断していた、そこに錯誤が
あったのではなからうか。また、昼間
見て敵がいなかったとしても、日没後
侵入してくることは極めてありがちな
ことである。

想像しうる唯一の慰みは、あれは助
攻作戦ではなくて敵が石橋を渡って日
本軍の背後へ迫ってくるのを防ぐため
の歯止めの中隊と解釈できなかったか
ということである。山崎中尉もそう解
釈していたかもしれない。高地に、予
期していなかった敵を発見した一分隊

そして岳麓山も、森閑として風の音一
つ聞こえては来なかった。隣の陣地に
は、昼のあいだ、寺見少尉の顔が見え
ていた。第七中隊だ。しかし主なき陣
地は今はいっそりと静まり返っている
ばかりである。

第七中隊の戦闘

その夜は一睡もしなかった。

焦燥の一夜が明けて、松下中隊長が
陣地へあがってきた。中隊長は大隊長
から聞いてきたばかりの第七中隊の昨
夜の戦闘ぶりを話してくれた。

第七中隊が目的の高地に到着したと
き前方の闇の中から「七中隊左へまわ
れ!」と大声で叫ぶ者がいたという。
おかしいな、そんなところに日本軍が
いる筈はないのだがと誰もが不審に思
いつつも、一箇小隊が左の方へ迂回し
ていった。すると、突然、真正面から
重機関銃が火を噴いた。まともに銃弾
を浴びてバタバタと兵は将棋倒しに倒
れた。敵の重火器は更に数ヶ所から闇

長が、中隊長に攻撃を見合わせられて
はと意見具申したという。そのとき山
崎中尉は「命令だから攻撃する」と云
いきったというのだ。

梅溪河は前日と同じようにキラキラ
と空をうつして光っていた。石の橋は
数百の敵が夜の間に通過して惨劇を惹
き起したとはとても思えない孤独な姿
をボツンと丘陵の間からのぞかせてい
る。

第七中隊が悲壮な最期を遂げた無名
高地も見わたせたが、全ての古戦場が
そうであるように、激戦の跡と思われ
るものは双眼鏡でいくらのぞいてもも
う認められなかった。そこには平凡な
丘があるのみである。このようにして
戦いの悲惨さは忘れられていくのであ
ろう。この、自分達が命をかけて戦っ
ている湘桂作戦そのもののさえ、やがて
全ての日本人の心から忘れ去られてし
まうに違いない。そう思うと柄にもな
く涙がこみあげてきて目の前の岳麓山
がうるんで見えた。この時代に生れ合
わせてきた青年たちのこれが宿命とい

うものだろうか。

岳麓山頂、想いは尽きず

第三大隊攻撃開始

私は壕の中で腰を下ろすと、急に眠りたいという猛烈な欲望に襲われだした。十四日の夜、鉢巻山を攻撃したときから十七日の今日までほとんど眠っていないのである。第二大隊が交替して予備隊になったときかされ、中隊長が陣地にいてくれると思った瞬間、緊張がほぐれてどっと疲労が全身にひろがってきたのだ。

「おい、篠田君、一寸見に来いよ、第三大隊が石の橋を渡って攻撃しはじめたぞ」

中隊長が呼んでいるのが遠くできこえたが私は霧のようにしのびよってくる睡魔にはどうしても勝つことが出来

なかった。

「石の橋の向うに丘があるやろ。その丘から物凄う撃って来よる。

こっちからも撃ちよるわ。ゆうべ七中隊がとった陣地から重機でジャンジャン撃ち返しよる。その下をくぐって歩兵が行きよるわ」

折角の中隊長の実況放送もだんだん声が遠のいていってとうとう私は前後不覚に眠ってしまった。

読者には申し訳ないが第三大隊の攻撃については私は一行も書く資格がない。生きて帰って三十年後の今日こんな戦争回想録を書くことになると思う。いたら責任観念から臉を指で押し開いてでも観戦したことを思う。見なかったことを見たようには書けないが、やがて石橋の向うの丘も日本軍が突撃

して占領したのであろう。そして後続の中隊もほとんど石橋をわたり岳麓山の尾根や溪谷へと進撃していったものと思われる。しかし懸崖による敵の抵抗はすさまじく攻撃戦はその日の夜半まで続いた。

夕刻になって私は目覚めた。目覚めると頭は再び冴えていった。岳麓山前壁の複雑な地形をぬって進展していく戦闘の推移が、山腹に響く銃声や手榴弾の炸裂音によって、手にとるように察知されたからである。

さて、ここでもう一度、十六日夜の第七中隊全滅前後の模様を分析したいと思う。あの夜、二十一時に渡河点まで進出しながらなぜ二時間も待たなければならなかったのか。如何に困難な架橋作業とはいえ僅か三十米の橋をかけるのに二時間とは長すぎはしないだろうか。まして、特に迅速を要求されていたあの状況の下に於てである。無名高地で銃声が始まったのは既に二時間を経過した二十三日であるから、第七中隊の全滅が原因であったとは考えら

れない。

また何故突然反転の命令が出たのだろう。第七中隊全滅の報をきいて大隊長は氣後れしたのだろうか。戦争とはそんな生易しいものではない筈だ。岳麓山攻撃の最初の意気込みでは一箇中隊はおろか一箇大隊が全滅しても取ってみせるだけの氣概があった筈だ。

大隊副官三谷中尉が後に語ったところによると、大隊長はあの渡河点のところで、通信中隊が仮設した野戦電話を使って連隊長に報告したという。

「第七中隊が全滅しました。今夜の攻撃は中止します」

連隊長は勿論承知しなかった。

「一箇中隊が欠けたくらいで攻撃中止とは何事だ。百法手段をつくして攻撃せよ」

「出来ません」

「命令だ。攻撃せよ」

「出来ません」

押し問答が続いた。敵前である。両者のあいだに奇立ちが見えてきて、最後に連隊長は怒鳴りつけた。

「そんな大隊はいらん！」

ガチャンと受話器をおろした。

渡河点反転の真相

何故大隊長はそこまで強硬に連隊長の命令を拒否したのか。帝国陸軍の厳正な軍紀の下で命令に背くということとは異例中の異例である。私は他にそんな例をきいたことがない。まして敵前における攻撃命令である。陸軍刑法では敵前に於ける命令違反は銃殺に処すと決めている。大隊長が軍法会議にかけられなかったのが不思議なくらいである。

それから一年近くもたったある日のことであつた。たしか昭和二十年の五月だったと思う。その頃私たちは敵中突破作戦という次の作戦に入っていたのであるが、たまたま広西省の小さな部落を通過するときに杉浦中尉（幹部候補生六期）と一緒にあった。あの夜最初に渡河することになっていた第六中隊の第一小隊長である。その時、杉

浦中尉は話してくれたのである。「架橋作業をしていた工兵小隊長が分隊長を振り返って云うんだ。おい、これはしくじったぞ、資材が足りないよってね」

その夜、運命はどこまでも中国軍に味方したのである。杉浦小隊も工兵隊の作業を手伝っていた。そして、あと五米というところで資材が足らなくなったのだ。嘲笑うように、黒い水面が彼らの前にひろがっていた。わずか五米、然し入って渡れる水深ではない。この五米の誤差のために、此処まで来ていながら第二大隊の岳麓山攻撃のすべての努力は水泡に帰したのである。

「俺は腹を切らねば」

工兵小隊長は悲痛な声で云った。宿命の五米、これが第二大隊反転命令の真相であつたと思われる。

しかし工兵小隊長は腹を切らずにすんだ。大隊長が第七中隊の全滅を理由にして連隊長に攻撃中止を申し出てくれたからだ。部下の苦境を察して、軍法会議を覚悟の上で攻撃命令を拒否し

た山口少佐の貫録は、恰も歌舞伎の舞台に見るような絢爛とした古えの武将の風格を偲ばせてなお余りがある。

遂に山頂に立つ

六月十八日の夜が明けた時には岳麓山は完全に日本軍の手に帰っていた。私たちは四日間世話になった陣地を下りて石の橋を渡り岳麓山へ登っていった。軍靴の下でカツカツと音を立てる石の橋を渡る時は思わず胸が熱くなるのを禁ずることが出来なかった。正直に云って、生きてこの橋を渡れるのが何よりも嬉しかったのである。

山径は生い茂る松の幹の間をジグザグになって頂上まで続き、その至るところに敵の射撃用掩体がつくられていた。然しこの道を行った日本兵はごく一部であったろう。多くの中隊は道のない谷に分け入り尾根を越えて、更に困難な地形を克服しながら、山頂めざし死闘をつづけて進んだに違いない。驚いたのは敵の重砲の位置である。

数十門のそれら重砲はことごとく谷間の、日本軍から見えない場所に据えられていた。屋根のように網を張り上に蔓草を匍わせたそれらの陣地は、恐らく航空機からも発見されなかったであろう。射撃命令はすべて頂上の監視哨から電話線で下達されていたらしく、無数の電話線が樹木の根をぬって敷かれていた。砲手は直接日本軍を見ることなく、電話で命令を受けると、予め与えられている上下左右の角度に砲身を合わせるだけで砲弾を日本軍部隊の真中に正確に落下させることが出来たのである。

わが荒鷲部隊に監視所を爆破されたためそれらの砲は命令を受けることが出来なくなり徒らに無用の鉄塊と化したのであった。一升塚のような砲弾が随所に高く積み上げられたまま放置されていた。直径は十五糎あるという。

頂上に立って北を振り返ると、湘江が竜のような雄大な姿を湖南の平野に横たえていた。地平線はかすんで見えなかったが、湘江の水だけは汪洋とし

てどこまでも続き遂に天に注いでいるように思われた。この湖南の平野には既に幾多の日本兵の骨が埋められている。しかし、此処に、大陸を縦貫する鉄道が敷設される日も遠くないであろう。それが広西省、マレー半島、シンガポールに達して、いつか大東亜戦争が完遂される日のことを私たちは夢みた。白人の亜細亜支配の野望を砕くための戦いであった。そのためには己れの利益を護るためにアメリカに亜細亜を売り渡そうとする蒋介石を先ず討ち滅ぼす必要があったのだ。争ってアフリカ大陸侵略をやったのけた白色人種が阿片戦争以来亜細亜大陸侵略を執拗に企てている。われわれの亜細亜大陸まで彼らの植民地にされてたまるものか。それが私たちの戦いの理念であった。亜細亜を護り得るものは私たち日本軍をおいて他にないのだという自負心があった。命をかけてやるだけの、やり甲斐のある仕事だと固く信じて疑わなかった。

終

あとがき

歩兵第二百十六連隊は岳麓山攻略の功績で軍司令官から感状を受領した。「また負けたか八連隊」の汚名を立派に雪いだのである。岳麓山陥落と同時に檜部隊が長沙を占領した。それから約五十日後の八月八日（昭和十九年）檜、嵐、広の三部隊の前に衡陽の中国軍が投降してきた。衡陽には米空軍の大飛行場があり当時米軍機は日本本土を爆撃するときはこの飛行場から飛び立っていたので、同地が日本軍の手に帰したことは国民の生活を非常に明るくしたものなのである。そして九月三十日、樺部隊は常寧を占領、部隊は更に前進して十月下旬には広西省の全に進出した。そして十一月十日には鯨部隊が主力となって桂林を、鏡、幸両部隊が柳州を占領するのである。

歩兵第二百十六連隊の第二大隊は全の市街からかなり離れた山麓に半年ばかり駐留することになったが、ここで筆者は復興隊長という新しい任務を与えられた。そのときのことは「復興隊長奮闘記」の中で稿を改めて書く予定である。そして同年十二月の末、命をうけて急遽北京に向って単身出張することになった。暗号教育のためであったが、東の間の平和な生活を味わい左下のような写真をうつす余裕もあった。

北京へ行くときは岳州まで軍用トラックを何台も乗りついで苦心惨憺の末たどりついたので、翌昭和二十年四月再び前線へ戻るときには桂林まで既に鉄道が完成して思い出多い戦場のあとを新幹線のように一路全まで突っ走ることが出来た。もっともレールも車輪も新幹線の比にあらず軽便鉄道の域を出ないものであったが、兎も角も大陸縦貫鉄道の夢は一步実現に近づいていたのであった。

本文中にも書いたが、第七中隊が全滅した翌朝、私達が命をかけて戦っているこの湘桂作戦さえやがて日本国民から忘れられるときがくるだろうと、何故かふとやるせない気がしてきて不覚にも涙がこみあげてきたことがあった。しかし、私たちの行動が、次の世代の青年たちから侵略ときめつけられる日が来ようとは夢にも考えてはいなかった。それはたとえ、日本を占領しに來た敵国の將軍によって巧妙緻密に計画され改竄された学校教育の結果であったにせよ、戦場で日本をはじめ亜細亜民



族の平和を願って死んでいった人たちへの冒瀆ではないだろうか。もう一度第一頁の前の地図を見てほしい。彼ら白色人種こそが亜細亜の侵略者だったのだ。そして今なおその野望は平和に名を藉りて狡猾に進められつつある。私はこの事実を声高く叫びたい。しかしその声が政治的に、また思想的に利用されることを極度に恐れるものである。民族の理想のためには、自分の貴い生命をさえ一瞬の火花と散らせて死んでいった人たちのいたことを忘れないでほしい。私の願いはただそれだけである。敵国の将軍が、征服者の権力にまかせて作りあげた偽りの歴史の背後に、レジャーも知らず恋愛も知らず青春の情熱をひたすら民族の理想にかけた、君たちの前の世代の希求が隠されていることを、ただただ知ってほしいのである。そのために私は戦争の回想を書きつづるのである。

昭和五十年四月十九日